



湯淺 秀男 先生

追悼文集





# 目次

		(敬称略)
湯浅秀男先生追悼集の企画に当たって	新井 民夫	4
追悼集の企画に寄せて	湯浅 律子	5
各追悼文		6
湯浅秀男先生を悼む(東京大学工学部ニュースより転載)		73
湯浅秀男先生年譜		75
謝辞		76

## 各追悼文 構成

	(敬称略, 各分野 50 音順)
ご親族	
湯浅 美祢子	6
湯浅 敏男	7
名古屋大学	
飯塚 光保	10
石黒 章夫	11
石田 幸男	12
伊藤 聡	13
井上 剛志	14
上山 英三	15
小田島 正	16
大嶋 和彦	17
佐野 滋則	18
玉木 徹	19
外山 勝彦	20
中野 由晴	21
細江 繁幸	22
羅 志偉	23
劉 軍	25

## 研究関係

浅間 一	26
伊藤 宏司	29
上田 完次	30
川端 邦明	31
嘉数 侑昇	32
北村 新三	33
北森 俊行	34
木村 真一	35
倉林 大輔	36
新 誠一	37
高草木 薫	38
田所 諭	38
土屋 和雄	39

## 東京大学

新井 民夫	40
稲田 紘	41
太田 順	42
小林 郁太郎	43
鈴木 宏正	44
高橋 宣一	45
鳥居 徹	46
藤末 健三	47
保坂 寛	48
前田 雄介	49
毛利 尚武	50

## 新井研 OB

梅田 和昇	51
掛川 悠	52
小林 祐一	53
佐々木 順	54
原 光博	55
藤本 智也	56

新井研学生

井澤 秀益	57
稲垣 伸吉	58
上田 隆一	59
香月 理絵	60
鬼頭 朋見	61
耕田 孝英	62
小林 智彦	63
杉 正夫	64
鈴木 健了	65
千葉 龍介	66
原 崇之	67
深澤 佑介	68
洞田 悟志	69
松本 高斉	70
水田 貴久	71
山野辺 夏樹	72

## 湯浅秀男先生追悼集の企画に当たって

前東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻助教授 湯浅秀男先生は、平成14年9月18日ご病気のため四十一歳という若さで急逝されました。あれから5ヶ月が経ちますが、湯浅先生が笑いながら私の部屋のドアを叩いてくるのではないかと今でも思います。日ごろ大変エネルギーギッシュに活躍されていた湯浅先生の突然の死去は、残された者にとって本当に信じられない心地です。

残されたご家族、奥様律子さん、長女範子さん、次女玲子さんは悲嘆にくれていることと思います。また、御母堂美祢子さん、弟敏男さんや律子さんのご実家原さんのお宅においても同じ思いでしょう。ですが、湯浅先生はきっと残されたご家族に「しっかりと歩んで言って欲しい。」と欲していることなのでしょう。

そこで、残されたご家族、それもまだ小さくて湯浅先生の思い出がしっかりと残っていないお子様たちのために、そして、湯浅先生の急な旅立ちに悲嘆にくれている我々のために、故湯浅先生との思い出、追悼の言葉を集めて文集としたいと皆様に声を掛けました。短い期間でしたが、63件の追悼の言葉が寄せられました。これによって、ご遺族の方には、研究・教育の場における故湯浅先生の姿をより深く知っていただくことができます。

この追悼文集は、幅広く活躍されていた故湯浅先生への私たちの感謝の印として作り上げました。この文集が、故湯浅先生との思い出をいつまでも色褪せさせないための一助となることを願います。

平成 15 年 2 月 6 日  
東京大学 新井 民夫

## 湯浅秀男追悼集の企画に寄せて

夫の生前中は、皆様には、ひとかたならぬお世話になり心より厚くお礼申し上げます。この度は、夫の追悼文集を発行して頂き誠に有り難うございました。早速、拝読させていただきますと結婚 6 年 9 ヶ月余りの私には夫のまだまだ知らなかった面がたくさんあり、また、ご立派な先生方、同僚の皆様、学生の皆様に親しくお付き合い頂いていた事を大変嬉しく思いました。

私も 2000 年 4 月に今まで続けていた名古屋音楽学校講師、春日井市音楽コンクールの実行委員等の仕事を辞して東京へ引越しました。官舎の皆様には、いろいろ学ばせて頂くことも多く、また、幼稚園、児童館では子供を通してすばらしい多くの友人と巡り会い、専業主婦として有意義な時を過ごしていました。そんな矢先の出来事でした。

私もこの先二人の子供を育てていくという大きな使命感で肩の荷がずしりと重くのしかかっています。

この追悼文集は、私と二人の子供にとって何にも勝る宝物となることと存じます。この悲しみを乗り越えていかななくてはと強く感じております。有り難うございました。

平成 15 年 2 月 10 日  
湯浅 律子

## 最後の仕事だ

湯浅 美祢子

早朝、電話のベルで起こされた。入院中の夫の病院からで「すぐ来て下さい」とだけ言った。長男の秀男と一緒に病院へ駆けつけた。ゆうべも消灯時間まで、私はいつものように大部屋の、夫の病室で過ごした。そのとき変わったことは何もなかったのだけれど……。

ナースセンターで名前を告げると、昨夜と違う個室へ案内された。夫にはいつもチューブが繋がっていたのに、それが全部はずされて、すっきりしていた。それを見たとき、間に会わなかったことを思い知った。主治医に呼ばれた。息子と入ってゆくと、「解剖させてくださいませんか」とおっしゃられた。私は「今まで針を刺しづめだった。もうこれ以上からだに刃物を当てるのは勘弁して」と治る見込みの薄い失明の十年間や、警報がよく鳴った辛い血液透析を思い、返事とした。

「僕は解剖に賛成だ」と秀男が口をはさんだ。その気になれない私に彼は続けた。「僕は賛成だよお母さん、これからの医学に少しでもそれは役立つと思うから」

「……」

「同じ病室だった人達は、お父さんが亡くなったことを知る。似た病気の自分を思い、正確な所見を知りたいと思うだろう」

無言の私に更に続けた。「お父さんは仕事が好きだった。入院、退院を繰り返して仕事がやれなくなってゆくのは、闘病より辛い事だったに違いない。最後の仕事だ」 ”最後の仕事だ”と言った息子の言葉に私は、体に電流が走ったようで動けなくなった。夫が創業した会社である。入院中に役不足の私が弱音を吐いても、「やめるな」と言い続けた。目が見えず、立つこと歩くことも出来ない上に、手足が痺れていたし一日おきの血液透析もある。それでも退院したら電話に出るつもりだった。耳だけは聞こえたから……。

全く思いがけない‘死んでから出来る仕事’があることを、秀男は教えてくれた。昭和五十九年六月、彼二十三歳のときである。

今年九月、その秀男が四十一歳で急逝、お嫁さんは出産のため、春日井の産院にいた。「夫と連絡が取れなくなった」

と電話を受け、私は勤務地東京へ……。自宅で就寝中の突然の死だった。発見したとき三日以上が経過していると推測出来て、死因確定の必要から行政解剖が行なわれた。

毎日午前零時過ぎの帰宅が、十数年続いていた。いつも、まわりに気を配り、弱音は聞いたことがない。笑顔を絶やさず親切だった。過労が積もっていたのだろうか。若い有能な学者を失って……と多くの人に惜しまれているけれど、自分自身は、やり残した仕事が、あまりにも多すぎはしなかったか。

息子が夫の解剖を「最後の仕事だ」と説得してくれたこの言葉を、私は生涯忘れることは、ないであろう。

平成 14 年 12 月 10 日



兄、秀男に物事を頼んで、時間的問題を別として、「断られた」という経験をお持ちの方は、ほとんどいないと思います。例えば中学時代、当時の湯浅商店は店頭にて小売も行っており、毎朝シャッター開けが兄弟の日課になっていました。このシャッター、昭和 38 年に設置されたもので、当時でさえ錆びて重く、開けるのが大変な代物でした。しかし、いつしか私(敏男)が日課をさぼる様になり、兄が、毎朝のシャッター開けを行うようになっていました。シャッター開けに拘わらず、すこしでも正当性があれば、他人の分担はともかく、行動するのが兄の基本的な考え方だったと思います。

話が飛びますが、兄は理科全般に興味を持っていたように思います。たとえば、中村高校時代、当方が兄に不当な依頼をしたときに、断る理由を訊くと、「アデノシン三リン酸(ATP)が減る」と答えて笑っていました。もちろん生物だけではなく、電気や宇宙、その他自然科学全体に広く興味を持っていたようです(電気はトランジスタテスト(ディッパー)を自作していましたし、寒中、兄と一緒に月食の観察もしました)。

さて、そんな兄だったのですが、一つだけ正当な依頼を断られた記憶があります。母の話ではないのですが、父(範子・令子から見れば、父方の祖父)は糖尿病を患い、末期はインシュリン注射が欠かせなくなっていました。月曜は右上腕、火曜日は…、とローテーションするのですが、日曜日は臀部注射ということで、父自ら注射を打つことが出来ません。そこで、父は当方たち兄弟に注射を指示したのですが、兄は決してやろうとはせず、この注射の仕事だけは当方が専属で受け持ちました。

母からの伝聞ですが、小学校に入るかどうかの頃、家族で三重県の朝明溪谷に遊びに行ったとき、溪流マスの釣堀がありました。他のお客さんが釣るのを眺めていたのですが、釣ったマスをその場で捌いてしまうのを見て、兄は急に「帰ろう、帰ろうと」ぐずりだした、ということです。生物を含めた自然科学には滅法強かったのですが、血を流す生き物には滅法弱かった、それが、父へのインシュリン注射の拒否、正当理由があっても断った原因と思っています。この私の考え方、私としては正しいと思っていますが、今となってはそれもできません。

### 余談その1: 遺伝

湯浅秀男の血液型はAB型で、父のA型、母のB型と説明がつきます。私も兄と同じAB型、奥さんの律子さんもAB型、範子ちゃんもAB型、令子ちゃんもAB型と日本では少数派のはずのAB型ばかりになっていました。

兄は中耳炎を患ったことがあり、以後は綿棒で耳掃除をよくしていました。東大の研究室にも耳掃除用の綿棒が用意してありました。母の耳は乾燥型、父は湿潤型、兄は湿潤型、当方は乾燥型と、この点は血液型まで同じ兄弟でも異なっていました。

### 余談その2: 論理構成

論理構成の良さには、弟の私から見て敬服したというか、恥をかかされたというか、そういった記憶があります。実家の近所に名鉄常滑線の道徳駅があり、名古屋市の都市計画で高架事業が行

われました。ちょうど兄が中村高校に通っていた頃です。道徳駅高架に関し住民アンケートがあり、大江駅に一部の急行が停車するにもかかわらず、1本の急行電車も停車しない道徳駅というダイヤ構成だったので、名古屋市の発表した資料(名古屋市内の常滑線の乗降客順位は、1.大同町駅 2.道徳駅 3.大江駅、以下略)を元に、道徳駅への急行電車の停車検討を要望としてしまいました。ところが、兄のアンケートの答えは、緩急接続(大江駅は退避可能)、急行の速達性をはじめ、地域交通全体からの視点で書かれ、物事の本質を捉える趣旨でした。兄は少なくとも高校生の頃には論理の美しさを感じていたと思います。

### 余談その3:睡眠

物心ついた頃から、兄が大学の学部2年生(私が宇都宮大学へ入学するまで)まで、夜は同じ部屋で寝ていました。私が模型工作等で22時を過ぎても電燈を消さないでいると、「眠い、早く電気を消せ」と、兄にしては珍しく文句が出ました。そうして、私が常夜灯を含め部屋の電燈を全て消すと、兄が常夜灯を点けなおして就寝しました。余談ですが、常夜灯に関してはその後も同じで、弟の私は現在も点けずに就寝しますし、兄は最後の夜まで点灯して就寝していたとのこと。さて、そんな早寝のはずの兄でしたが、大学院へ行くようになると、終電車(23時40分頃)で帰ってくるのが普通となっていました。職員となってからはご存知のとおり、研究のためとはいえ終電車に近い時刻の帰宅。本当は早く眠りたかったのかも知れません。

睡眠関連でもう一つ。阪神大震災の当時、まだ独身だった兄は、母・弟の私との3人で暮らしていました。名古屋では震度3だったと思いますが、私は早朝の揺れに目を覚ました。母も目を覚ましたのですが、兄はただひとり熟睡のまま。睡眠が深かったのでしょうか？

### 余談その4:秀男語録

昭和44年7月(それ以前は断片的で曖昧なものしかありません)から平成14年9月7日(土曜日)金山駅での「じゃあ、また」。まで、当方の記憶に残っている兄の言葉のうち、印象に残ったものを拾ってみます。

#### 「9番(NHK教育)以外みんな同じ」

これは、アームストロング船長が月着陸した中継を兄弟揃って見ていた時、兄がテレビのチャンネルを回しながらの言葉です。

#### 「アデノシン三リン酸(ATP)が減る」

高校時代、宿題に解らないことがある、と兄に言って勉強を教えてもらっていましたが、教えてもらうという範囲を越え宿題代行の状況になると、こう言って断られました。

#### 「ああ、1(ONE)フレーム入ったな」

兄はロボットアニメ(ガンダム等、リアリズムを考慮したもの)が好きで、ビデオ収録し、再編集時にCMをカットしていました。今ならHDD内蔵の編集機能つきビデオも珍しくないのですが、兄は手で毎秒24フレームのタイミングを取っていました。細かい所ですが、自分が手掛ける以上、中途半端なものは残したくなかった兄の気質がこんなところからも伺えると思います。

#### 「チーズビット8個でチーズバイト」

コンピュータを知っていれば簡単なのですが…(ちなみにチーズビットというのは菓子の名称で

す)。

NEC ソリューションズ ミドルウェア事業部 AP サーバ[OEM 製品]グループ  
旧所属: 名古屋大学大学院工学研究科 自動制御研究施設  
伊藤研究室(昭和 61 年年修了)  
飯塚 光保

先輩が嬉しそうにしている。「これ見る?」「えっ、ねね猫押えてコピー取ったの?」工学部一号館北棟地下1階、居室には滅多に陽が射さない。化工と同じ階で刺激臭の薬品を一日中カラカラ混ぜている。湯浅君とは当時そんな場所、同期の居室で過ごした。隣は施設付属図書室、研究のため夜はコピーがおおらか。そう勉強しない人達はここを地下コピー研と呼び猫などコピーしていた。私や先輩を除いて幸い研究室には優秀な人ばかりだったが、湯浅君はその中で抜きんでいた。授業に出ていない訳がない、分かり易く教えてくれない訳が無い。宮崎駿の映画をこよなく愛し、常に難解そうな本を喜々として勉強し、それでいて誰にも優しく、アカデミックな分野ではいざとなると頼りになる奴だった。そう言う意味で周りの期待を裏切る事は無かった。スタートは一緒だけれど、勉強を教える人、教えて貰う人の関係はずっと変らなかつた。

彼は当然大学に残り私は就職した。久しぶりに彼の居室を訪ね、業務の古典制御をまた教授頂いた。出来ない人は何度も同じ事を聞く。新しい校舎燦々と陽の当る見晴らしの良い居室だった。そこでもやはり本に囲まれ喜々として研究していた。周りを変っても彼は全然変わっていなかった。また数年後、彼の肩書と研究内容が想像を越えていた。それじゃ、名刺を作るのも、履歴書を書くのも大変だろうと要らぬ心配をした。夜遅く電話をしても相変わらず研究室に居た。あちこちで勉強を教えているとの事だ。やっぱり変らないねと思っていたその矢先、彼の HP で急逝を知った。しかし全く実感が湧かない。彼が変っている訳がないではないか。今度もまた少し超越した所に行っただけなのだ。湯浅君の事だから敢えて安らかにとは言わない、また肩書が長くなつたけれども、何処に居ようが喜々として勉強し、皆を暖かく指導しているのは変る筈が無いのだから。

9月21日の夜、突然私の携帯電話が鳴り、湯浅先生の突然の訃報を知った。2ヶ月ほど前には一緒に泊まり込みの研究会に参加しており、その元気なお姿を思い出し、その悲報にはただただ絶句することしかできなかった。以下では、一後輩からの湯浅先生の思いでを綴りたい。

湯浅先生が名古屋大学に在籍して居られた頃、小生とは所属する専攻は異なっていたものの、自律分散システムという同じ研究領域であったため、いろいろと親しくしていただいた。小生は、学位取得後にこの分野に転向したため、すでにこの分野で新進気鋭の若手研究者としてあまねく知られていた湯浅先生に、たびたびアドバイスをお伺いしたものである。小生の愚鈍な質問に対しても、ニコニコと笑顔を絶やさず対応していただき、時には先生の方から(!)私の居室まで説明に来ていただき、「聞く側」である自分の不躰さに恥じながらも、先生のお人柄の良さに私はすっかり惚れ込んでしまった。

一方で、学会での湯浅先生の存在は強烈であった。先生は、通常一番前の席に座り、ニコニコしながら講演者の話を聞かれた。そして、講演者の話に合わせてウンウンとうなずくのが常であった。ただし、日常とは異なる先生の姿が見られると大変であった。講演者から曖昧な説明や理論的にも不完全な内容が発せられると、その「うなずき」はパタリと止み、先生は目を閉じて考え込まれるのである。こうなると、講演者も(周囲の聴講者も!)気が気ではなくなってくる。冷や汗タラタラでの講演終了後、先生から飛んでくる容赦ないカミソリのごとくの鋭い質問に、ただただタジタジの状態になるのが畢竟である。ただし、その質問は極めて多くの示唆や含蓄に富んでおり、先生から質問を通して多くのことを学んだのは、先生の研究室の学生のみではあるまい。かくなる私も何度もタジタジになり(していただき)、それを通して多くのことを学ばせていただいた。本当に心から感謝を申し上げたい。

また、先生が希有であったのは、理論と応用という両輪をしっかりと持った研究をなされていたことである。双対性、熱力学回路網といった斬新な観点から知能発現のメカニズムを理論的に考察され、いよいよこれからというときに亡くなられた先生の無念さを思うと胸が締め付けられる。先生から薫陶を受けた者としては、この分野の発展に尽くすのが、先生への最大の恩返しだと考える。湯浅先生のご冥福を心からお祈り申し上げて、筆を置くことにいたします。

私と湯浅先生の出会いは、平成6年に私が電子機械工学専攻第2講座の教授になったときでした。講座を新しくスタートするにあたり、湯浅先生に講師として赴任していただきました。大学の多くの講座は同じ専門の教官で構成されるのですが、湯浅先生は電気科出身の情報屋、私は機械科出身の振動屋で、1つの小さな講座の中に異文化が共存する形になっていました。したがって、発足にあたり、このような共存形態がうまくいくのかという心配がありました。しかし、「案ずるより生むが易し」といいますが、この異文化の共存が、新しい文化形成にあたり、極めてうまく機能したと思っています。同じ研究室の中で、湯浅先生の指導する学生と私が指導する学生が机をならべているため、親同士は違った言語を話しても、子供はバイリンガルとして成長し、私の研究に湯浅先生の情報とコンピュータの知識が、また湯浅先生の研究に機械とハードの知識が移植されて融合し、研究が新しい方向に発展できたと思います。これも湯浅先生の自由闊達な性格に依っていることはいまでもありません。

その後、湯浅先生が東京大学に抜擢されましたが、これも私たちの研究室の誇りでした。名古屋大学の電気工学科、情報工学専攻、電子機械工学専攻、東京大学の精密機械工学専攻と、極めて豊富な経験をされ、また年齢的にも油がのり、これからその大きな活躍が期待されるときでした。この時期に、このような形でお別れしたことは非常に残念です。湯浅先生が名古屋大学の石田研究室に残された有形無形の財産は、我々が必ず成長発展させていきますので、見守ってください。

湯浅先生には名古屋大学の学生時代から面倒を見ていただきました。物理・数学をはじめ将棋からアニメに至るまで何でも知っていて、質問するといつも適切な答えをいただけ、まさに「もの知り」と言う言葉がぴったりでした。毎日終電まで研究室にいらっしゃり、やはり努力・勉強の裏付けがあるんだなと思いました。とはいっても、かたい印象はなくて人当たりがよく、学生たちの企画する研究室内の行事にもいつも快く参加していただける、とても話しかけやすい「よいお兄さん」といった感じの先生でした。

大学を出てからも研究関係でご指導を仰ぐことも多く、特に研究の職業についたばかりのころは研究をどうやって進めればよいのかわからず、よく相談にのっていただきました。そんなとき、個々の問題については自分には難しすぎてついていけないものもありましたが、全体的には研究方向・根本の思想を1つ高い視点からわかりやすくアドバイスくださいました。

また、自分の国際会議の発表にも無理を頼んで同行していただいたこともありました。今思うと過保護だったように思いますが、当時は非常に心強く、楽しかった思い出として残っています。社交性の少ない自分を多くの研究会のメンバーに加えていただき、現在でも研究に関する大切な情報源になっています。今後、研究会や学会に出かけても、お会いできないと思うと寂しくて仕方ありません。

今後はご指導いただいたことを思い出し、先生を目標の1つとして努力していきたいと思います。今の自分の状況は、先生のお力による部分は決して少なくありません。本当にありがとうございました。

私と湯浅先生の出会いは、平成7年4月に私がオークマを退社し、名古屋大学電子機械工学科石田研の助手に着任したときです。当時、湯浅先生は石田研の講師として研究・教育活動に従事しておられ、以後、湯浅先生が東大に移られるまでの約4年間、様々な時を共に過ごさせて頂きました。

湯浅先生の代名詞であった自律分散システムは、電子機械の学生に非常に人気が高く、そのおかげで毎4月の4年生の研究室配属時には、いつも石田研は希望者数が1番多い講座でした。(もともと、配属後に石田グループと湯浅グループに分かれるときには、湯浅グループの希望が多く、毎回大変でしたが...)研究室では、毎夜のように、湯浅グループの学生が非常に熱っぽく自律分散システムの研究に関する議論をしていたのが、ついこの前の出来事のように思い出されます。

週に一度くらいは運動をしようと、湯浅先生、石田先生、大同工大の大嶋先生、電子機械早川研の尾形先生らとともに、名大から東山動物園をまわってくるアップダウンのきつい約5kmのコースをよく走ったこともありました。見かけによらず湯浅先生は非常に速く、遅れないようにするのが大変でした。また、石田研では、一年に一度(主に夏休み前)、1泊2日で講座旅行に行き、その夜は徹夜で麻雀をするのが、慣例となっておりました。湯浅先生は、なぜか麻雀も強く(+うまく)、非常に運が強く滅多に負けない私も、正直、湯浅先生に勝った思い出がありません。

今思い出されるのは、湯浅先生は研究だけでなく非常に多方面に興味を持ち、それぞれで非常に高いレベルまで自分を押し上げられた方であったことです。また、それでいて、大変な気配りを自然にされる方でもありました。今回の湯浅先生の御他界は残念でなりません。ご遺族の方々の今後のご多幸をお祈り致します。



名古屋工業大学大学院 ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー  
旧所属:名古屋大学石田研究室(平成8年度博士修了)  
上山 英三

湯浅先生の突然の訃報に際して私は絶句するだけでした。その後は先生的笑顔ばかりが思い出され、その先生がもうこの世にいないと認識するたび、悲しく残念に思います。

湯浅先生についての記憶は、学部2年次後期にまで遡ります。電気回路工学の演習の時間に故伊藤正美先生から「とてもいい人です」と湯浅先生が紹介され、そのときの照れ笑いを浮かべる先生の姿が思い出されます。手をひらひらと振って「違う、違う」とでもおっしゃりたげに謙遜される姿に私は親しみを感じたことを覚えています。

そして、修士課程進学時にかねてからの希望通り、私は湯浅先生のいらした旧伊藤・細江研究室に配属されることになりました。その後は、ゼミを含む研究全般において様々な教示・助言を頂きました。先生は深夜まで研究室にご在室で、私たちが研究で行き詰まった折には、いつでもにこやかに応じて頂きました。また博士課程に進学するに際しては私なりに迷う部分も多かったのですが、先生の存在が決断の決め手になりました。

一方、研究活動以外での湯浅先生との楽しい記憶も多く思い出されます。深夜の研究室でTVゲーム等をしたり、ビデオテープ等を貸し借りしたり、ゴルフに行ったこともありました。何をされるにしても先生はいつもにこにここと楽しげでした。また、学会等の際、私はよく先生と同室させて頂き、キャンプのときも同じテントに泊まったものでした。

湯浅先生の思い出は尽きず、本当にお世話になったと実感しています。先生の研究・教育そして人生全般に対する御姿勢を思い出して今後の自分の指針にしたいと思います。

最後に、残された御遺族の方々の御心中察するに余りありますが、先生のことを誇りに思い、そして御自身に誇りをもって人生を歩まれることを望みます。そして、湯浅先生、最愛の御家族を残して旅立たれたことさぞ無念かと思えます。

御冥福をお祈り致します。

私が湯浅先生に最初に会ったのは電子機械工学講座の研究室配属のときでした。私が多脚歩行ロボットの研究をしたいと伝えると、ちょうど今そういった研究を始めようとしていたところなんだと答えられて、その場で「こうこうこういうロボットがあってこれを使って研究ができそうなんだ」とか、「これによってこうした効果が期待できるんだ」といった説明を熱心にしていただきました。ロボットに関する知識が乏しく、ただ歩行ロボットに対する興味だけでやってきた学生であった私に、とてもわかりやすく説明して下さったことを今もはっきり覚えています。

その後先生の下で研究をすることになり、博士号の取得まで指導していただいたのですが、その間、問題を抱えて困っている学生に対する先生のそうした優しい接し方はいつも変わらず、それがとても印象的でした。それと同時に、「学生の研究は学生主導で」といった指導方針がはっきりと見て取れる先生でした。わからないことが生じたとき、行き詰ったときに相談に行けば適切な助言を与えてくださるのですが、基本的に学生の興味の方向へ自由に研究を進めることを推奨していただきました。しかし、無制限な放任主義では決してなく、学会の原稿や、事務手続き上の必要書類などといった期日の決められた仕事などに対しては、ご自分にも学生にも厳しく対処されていました。そうした指導を受ける中で、私達は自然と本来の意味での研究活動というものがどういったものなのかを学ぶことができたように思います。

私たち学生とひとしきりゲームで盛り上がっていたかと思うと、ふいに端末室の隅のほうへ行かれて作業をはじめられ、そこへ学生が質問に行くと即座にその相談に乗ってくださるといった、非常に切り替えの早い先生でした。学生たちの間では「きっと複数の独立した脳があって常にどれもアクティブになっているんだろう」といった冗談がでてくるほどでした。そうした先生が私たちの指導をして下さっているというだけでなんだか安心できました。また、研究のことだけでなく気さくに付き合ってください先生は頼りがいのあるお兄さんといった感じでもありました。

先生が教えてくださった多くのことは今も私の行動決定の指針として根付いています。本当にありがとうございました。

ご冥福をお祈りします。

今から 14 年前の平成元年3月、名古屋大学工学部情報工学科に僕が助手として採用された時に、湯浅さんは既に伊藤研で働いており、先輩の加藤さんと3人でいつもつるんでいましたね。加藤さんと僕の部屋が8号館の3階、湯浅さんがその真上の部屋で、毎日3時頃になると加藤さんの号令でお茶の支度が整い、研究談義?に華を咲かせていましたね。

学生実験も3人が同じ部屋で行うことが多くて、うまく行かない学生に終わるまで付きっきりで面倒を見るあなたの誠実な態度は、何もかもが初めての僕にとって教員として見習うべき大切な姿勢だと感銘を受けました。ただ、そんな時でもなぜか3時頃になると学生に『ちょっと出かけてくるわ』と言い残し、30分程は3人ともいませんでしたね。

ジョギングもよくしました。東山公園までぐるっと1周30分とか、春には山崎川沿いの桜を見ながら瑞穂競技場まで走ったこともありでしたね。学内駅伝に工学部助手チームとして参加した時のことを忘れてはいませんよね。一走の僕が頑張って1着で帰ってきたというのに、二走を走るはずのあなたの姿が見当たりません。お茶目にも脇でのんびりとランニングに着替えてましたよね。でも結果は5位と大健闘でしたので良しとしましょう。

加藤さんの結婚披露宴では、深夜の研究室で2人で大笑いしながら出し物の準備をしました。湯浅さんの別荘があるからと鈴鹿までハイキングに行ったこともありました。学科の忘年会の2次会では滅多に聴けないあなたの『大都会』の熱唱が楽しみでした。深夜放送の『スタートレック』をこまめに録画しては編集して貸してくれましたね。結婚してからもお互いに子供ができる度、お祝いを携えてお邪魔したり来ていただいたり。

名古屋大学時代にあなたと一緒に働いた時間、遊んだ時間、楽しい思い出でいっぱいです。どうもありがとう。

そしてさようなら。安らかにお眠りください。

豊橋技術科学大学 機械システム工学系  
旧所属：名古屋大学大学院工学研究科 電子機械工学専攻(博士)  
理化学研究所 BMC 第Ⅰ期 制御理論研究チーム フロンティア研究員  
佐野 滋則

私が名古屋大学の学生だったときに、学生実験でご指導くださったのが湯浅先生との最初の出会いだと思います。確か計算機シミュレーションの実験だったかと思いますが、丁寧に説明していただき、つまづいていた際にも適切なアドバイスをいただき、実験もスムーズに進行したと記憶しております。そのとき私は湯浅先生に対して、明るく温厚で頭のきれの方だという印象を持ちました。その後修士では、非線形システム論に関する講義を受けました。水曜日の1時限の授業で頭がまだしっかりと働いていない状態で受講していたかと思います。確か私が受講した年から湯浅先生がその講義を担当したとおっしゃっていたかと思います。講義の内容は難しかったですが、非常に丁寧にわかりやすく説明くださいました。

その3年後、廊下ですれ違った際に、「だいぶ内容が変わったので、また時間があつたら聞きに来てください。」と誘われたことがありました。結局、受講することはありませんでしたが、それほど面識がなかった私を覚えていたことにびっくりいたしました。大変うれしかったです。

その後、私は、湯浅先生が非常勤の研究員として勤めていらした理研BMCで勤めることになりました。湯浅先生は非常勤でしたので、あまりディスカッションする機会がありませんでしたが、いろいろなアドバイスをいただきました。

湯浅先生、学生の時初めてお会いしてからの計9年間、いろいろなアドバイスをいただきありがとうございました。湯浅先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

新潟大学工学部 情報工学科  
旧所属:名古屋大学工学部情報工学科 大西研究室(平成7年度学部卒業)  
玉木 徹

95年の秋にロボットコンテストに出場するため、当時情報工学科の学部4年生だった私は、半年ほど電気電子の石田研に出入りするようになりました。主に夕方から夜にかけて研究室にお邪魔していましたが、その時間帯は湯浅先生の休憩時間だったのか、Mac や SunWS に向かってゲームをされている姿をよく見かけました。そんな研究分野も学科も違う私に、色々と親しく話をしていただきました。

一度湯浅先生に拡散方程式について尋ねたときに、見せていただいた数学の教科書がありました。そこには、赤い水性のボールペンで、人柄がよく表れている丸い文字がびっしりと書き込みしてあったことをよく覚えています。

先生が名古屋を離れてからはあまりお会いする機会はありませんでしたが、あのいつもの笑顔で、いまもどこかで誰かと話をされているような気がしてなりません。

名古屋大学大学院工学研究科 計算理工学専攻  
旧所属:名古屋大学工学部 電気学科(昭和 58 年度学部卒業)  
名古屋大学大学院工学研究科 情報工学専攻 博士前期課程(昭和 60 年度修了)  
外山 勝彦

湯浅秀男君と私の出会いは、学部専門科目の授業においてでありました。湯浅君は、教室の一番前の列、黒板に向かって左側の席にいつも座っていました。演習の時間に私が回答作成に困って質問すれば、彼はいつも笑顔で、しかし真摯に対応してくれましたが、その説明は実に分かりやすいものでした。彼に相談できる演習の時間は楽しい時間でさえありました。今から思えば、このことは彼の理解の早さ、発想の豊かさ、思考展開の綿密さ、説明の巧みさの現れであったと思います。

湯浅君はたいへん熱心に勉強をしていました。彼の講義ノートを見せてもらうことは、極めて有用でした。彼の興味の範囲は電気・情報系に限らず、工学の他分野にも及んでおり、夏休みの集中講義であった原子核工学実験まで受講して、見事に単位を取得したことを聞いたときには、その探求心にたいへん驚きました。彼は受講可能な単位をすべて取得したはずです。

湯浅君は、卒業後は電気学科の同窓会・二葉会の学年幹事を引き受けてくれました。学科 50 周年の際に作成した冊子では、私たちの学年のページを作ってくれましたが、それは彼が描いたユニークなストーリー漫画で構成されています。漫画を載せた学年は他にはありません。また、情報工学専攻の同窓会・名報会でも長らく本部幹事を勤め、その運営に献身的に尽くしてくれました。最後は東京担当幹事として、これから同会東京支部を立ち上げようというところでした。名報会会誌の表紙デザインは、ここ数年間いつも彼にお願いしていましたし、そのマーク「le」のデザインも彼の作品と聞いています。彼は絵やデザインの才能もありました。

湯浅秀男君は優秀多才で勤勉、しかしユーモアと遊び心を知っている人でありました。

平成六年。電子機械工学科の四回生だった私は卒業研究の配属先として石田・湯浅研究室を希望しました。石田・湯浅研はその年に新設されたばかりの研究室であり、講座の主である石田教授は気さくなお人柄で、まさに温厚篤実。お世話になった三年間でついに一度のカミナリも落ちませんでしたし、湯浅講師にあつてはご自身が多忙であるにも拘わらず、暇を見つけては私たち学生の面倒をみてくださいました。このような恵まれた環境の中で学生生活を送れたことを感謝するとともに、ご指導くださった両先生に改めて御礼を申し上げます。

湯浅先生はちょうど私達よりも一回り年上で、その当時32, 3歳でいらっしやったかと思います。先生は食事に出かける時に、必ず皆に声をかけて誘ってくださるので石田研の学生は揃って食事に行くのが半ば習慣になり、おそらくこれは現在も続いているのではないのでしょうか。研究室一同が一卓を囲んでの夕食は、さながら楽しい団欒のひとつで先生は私達のくだらない軽口や冗談にも至極気軽に応じてくださり、実にうち解けた雰囲気の中で3年間を過ごせました。他研究室に比べて学生間の結束が強かったのも、このような先生のお人柄がなせる業かと思います。

ところで、私は石田教授から研究テーマをいただいており直接、湯浅先生に研究上のご指導を賜ったわけではありませんが先生には学問以外のことをいろいろと教えていただいたような気がします。

例えば、

- 辛くても不平不満は言わないこと。
- 他人の嫌がる面倒な仕事でも頼まれたら断らないこと。
- 人前で他人の陰口は一切言わないこと。

これらは直接、先生が口になさったわけではありませんが、常日頃の先生を見ていて強くそう思った次第です。

無言の教えとは、このようなことを言うのではないのでしょうか。

大学院卒業後、私は学生時代の専攻とは無関係の仕事に就きました。

機械工学も電気工学も今の私には無用のものですが、湯浅先生のこの教えだけは忘れずにいたいと思います。

湯浅さんとの付き合いは、彼が卒研生として当時名古屋大学工学部情報工学科に在籍中であった伊藤正美教授の研究室に入って来たときに始まる。私は当時研究室の助教授であった。その年は、何人か大変勉強のできる学生が入ってきた。中でも彼が飛びぬけて優秀であったので今でも良く覚えている。縁があつてそれから20年近くずっと付き合いは続いた。その間、彼は学生から教員となり、結婚し、二人のお子さんを、東大へ移ったりと、さまざまな出来事があつたが、縁は切れなかつた。機会があるごとに色々な話をしたが、奥さんや子供さんの話しをするときのうれしそうな顔が一番忘れられない。仕事では、理化学研究所のバイオメテックコントロール研究所での自律分散に関する研究で、亡くなる寸前まで大変に世話になつた。彼の夢あふれる研究姿勢は、多少慎重すぎる私にとって貴重であり、極めて良い刺激であつた。彼との付き合いは私が研究を続けて行く限り続くものと思つて期待していた。それが、まさかこのように突然もう会えぬことになると思つたにできない。本当に大変さびしい。そして悲しい。



## 生命らしい新しいシステム設計理論研究の先駆者

——湯浅先生

理化学研究所 バイオ・ミメティックコントロール研究センター  
旧所属:名古屋大学大学院工学研究科情報工学専攻伊藤研究室  
羅 志偉

湯浅先生との出会いは、私が16年前の愛知工業大学の客員研究員時代に遡ります。あのとき湯浅先生は優秀な成績で名古屋大学大学院の修士学位を修得され、(故)伊藤正美先生の研究室で助手として活躍されていました。修士学位の研究内容は、人工ポテンシャル法による冗長マニピュレータの障害物回避に関する研究で、学会の学術論文誌にも掲載されました。八十年代後半は線形、非線形を問わず、システム理論研究の大躍進の時代でした。まず線形システム理論については、ロバスト制御**設計理論**研究が全盛期を迎え、 $H_\infty$ 制御理論とその応用研究が多くの若い研究者の憧れでした。当時同研究室の助教授の細江先生(現理化学研究所バイオ・ミメティックコントロール研究センターセンター長)が章さん(現東京商船大学助教授)を指導して状態方程式による解法を世界に先駆けて研究され、大いに注目されていました。一方、非線形システム理論については、カオスや分岐理論、シナジェティクス、散逸構造など、複雑な**現象を記述・解析する理論**が世界中の科学者の関心を惹きつけていました。こうした背景で、非線形数理をベースにした多様性、柔軟性に富んだ**生命らしい新しいシステム設計理論**の開拓を夢見て、伊藤先生のご指導で伊藤・湯浅・羅三人での非線形システム論勉強会を始めました。そこでは John Guckenheimer と Philip Holmes 共著の「Nonlinear Oscillations, Dynamical Systems, and Bifurcations of Vector Fields」を教科書とし、また、非線形振動子の引き込みによる生物運動制御に関する研究論文を読んでいました。多くの場合、私が英文を読み、湯浅先生がその数学的な意味を解説し、中心多様体、ノーマルフォーム、ホモクリニック軌道等々、難解な数学概念を幾何学的な図的説明で次々と明快に理解していました。時には難しい数式に遭遇してゼミを夜遅くまで続けて悪戦苦闘したこともありました。こうした勉学・訓練を重ねて、湯浅先生は勾配系の自律分散制御設計理論を構築され、多数のサブシステムが局所的な結合による相互作用を通じて大域的な秩序を形成させる設計論として、当時生命のホロニクスを提唱されていた清水博先生や理研の伊藤正男先生に大いにほめられ、その後における日本発祥の自律分散システム研究の理論基礎の一つとなっていました。この理論は後に湯浅先生によってポテンシャル汎関数の変分による反応拡散方程式の導出、グラフ上の反応拡散とそのポテンシャル汎関数など、さらに発展させられました。これらの理論の応用として、生物とロボットの多様な歩行パターン生成と適応、群ロボットの分散協調、冗長マニピュレータの拡散学習、画像処理と認識などの研究が展開され、多自由度系の多様性に富んだ情報処理・運動形成に重要な役割を果たしました。

湯浅先生は漫画を画くこと、アニメを鑑賞することがとても好きで、それが原因であるかどうかわかりませんが、学会での研究発表や普段の研究会など、常に他人にわかりやすく理解できるように直観的に説明され、もちろん厳密的な数式展開にも心がけて、また、工学の視点に立ったシステム数理展開に大変柔軟かつ豊かな思考の持ち主でもあります。それに加えて性格的に大変寛容で、難しい研究を行う、いや開拓する、わりには、若い学生諸君ともとても平易に付き合い、一緒に学食をしたり熱心に問題解決をアドバイスしたり、学問のみならず一人の人間としても周りから高く尊敬されていました。

その後、十六年間先生とは互いに別々の職場にいながら、日本国内のみならず、ハワイや北京、上海、香港など一緒に多くの国際会議発表に行ったり、理研バイオメディックコントロール研究センターでの研究打ち合わせをしたりして、共通の知的好奇心に引かれ、夢を見ながら研究交流を絶つことはありませんでした。香港へ旅に行ったときは先生のご家族も一緒でした。小さかったのりちゃんは見知らぬ人を見ると泣いてしまいましたが、秀男パパに抱かれるとすぐ笑顔になりました。そうしたのりちゃんを見ているとどれほど秀男パパが愛されていたのかよくわかりました。また、私が撮影したのりちゃんの写真をもらうと、先生はすぐに自分の計算機の壁紙に設定しました。のりちゃんをととても大切にしていることがわかりました。

こうした記憶を思い出したり、また今度生まれたばかりのお子さんのことを思うと、心が痛恨の極みで、なぜこんなに早く先生と別れなければならないのか、いまでも信じたくありません。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

写真:1994年6月4日北海道昭和新山にて



私が湯浅先生と知り合ったのは7年前です。私は末松先生に湯浅先生のことや先生の研究内容などを紹介していただき、私の研究内容と関連していた先生の‘自律分散システムのアルゴリズム’のテーマに興味を持ち、湯浅先生と一緒に研究したいと思い、日本に留学して来ました。来日当初、私は大きな不安と緊張感を心中に抱き生活しておりました。このとき、先生の優しさと包容力のおかげで先生が精神的な支えになっていただいたことが今でも忘れられません。自分が学校や日常生活で困難に直面したとき、いつも私は先生に助けられました。私は日本に来た後に日本料理が大好きになりました。特に、わさびが好きですので、私は外国でわさびを食べたいときには先生がわさびを贈ってくださるという約束がありました。

自律分散の研究の中に一つの重要な方法として発散方程式を用いて解明することがあります。我々はこの方法がとても難しいものであると認識し、なかなかこの方法を用いませんでした。しかし、先生はこの方法を用いて画像処理や多数ロボットのアルゴリズムなどの広い研究に対して素晴らしい成果を上げられました。私は先生の知識の広さや能力の高さに対してとても尊敬しています。

私は先生のような素晴らしい研究や人間性と目標とし頑張りたいと思います。先生、安らかにご永眠してください。

私は平成 14 年 11 月に東京大学人工物工学研究センターに着任し、お亡くなりになった湯浅先生が行うはずであった「統計データ解析」の授業を、代理で担当することになった。湯浅先生が前年度に作られた配布用資料などいただいたが、その内容の濃さ、丁寧さ、学生に理解させるための様々な工夫に仰天した。教育に対する熱意がひしひしと伝わってくる力作だ。研究者としてだけでなく、教育者として、湯浅先生に対する尊敬の念を新たにした。湯浅先生のような授業は私にはできないであろう。でも、故人の意思を継ぎ、湯浅先生の資料をそのまま使わせていただきながら、授業を行っている。

湯浅先生との出会いは、はっきり覚えていないが、多分科研費の重点領域「自律分散システム」が始まる少し前だったように思う。その頃は、故伊藤正美先生とともに、猫の歩行からヒントを得た、歩行機械の自律分散的制御や、自律分散システム・アプローチによる画像認識など、ユニークで大変興味深いテーマのご研究をされていた。まさに、今では当たり前のように考えられるようになった「自律分散システム」研究のはしりである。私が初めて主催し、今でも隔年で国際的に開催している国際学会「International Symposium on Distributed Autonomous Robotic Systems (DARS)」にもよくおいでいただき、熱心な議論をさせていただいた。

研究者としての湯浅先生は、特に理論に強かった。反応拡散方程式などを自在に操り、様々な問題を独創的な方法論で解く、というのが得意だった。研究会での湯浅先生の話には、しばしば驚かされた。その一方で、自らロボットを作るなど、決して理論のみに偏ることなく、実践的研究にも積極的だった。私自身、湯浅先生から、多くのことを学ばせていただいた。

湯浅先生は、難解な理論や概念でも、にこにこしながら優しい口調で、かつ楽しそうに話されていた。人の話を聞かれているときは、いつもうなずいたり、首をかしげながら熱心にお聞きになっていた。湯浅先生は、いつも問題の構造をすばやく捕らえ、質問はするどく、切れ味抜群だった。理解の仕方が凡人とは違っていたのだろう。彼の話聞きながら、一体どのような頭の構造をしているのだろうと思うこともあった。

科学研究費補助金重点領域研究「創発的機能形成システムのシステム理論」が終了した後に、20 名程度の研究者が集まり、次の新プロジェクトに関する議論を継続的に行っていた。それは「移動知」と名づけられた。「知」は移動によって獲得される、という仮説をたて、それを構成論的なアプローチによって検証するという新しい研究の提案である。自律分散システムや、創発システムの考え方を踏襲し、その設計論を明らかにするという、意欲的なプロジェクト提案であった。私がおのとりまとめをさせていただいているが、湯浅先生はその主要なメンバーであり、移動知のシステム設計論を構築するという最も重要な班のリーダーをお願いしていた。ここでも、「双対性」というユニークなアイデアで、「移動知」を体系化するという考えでいらっしやっただ。湯浅先生が亡くなったとは、今でも実感がわかない。我々は、かけがえのない極めて有能な研究者かつ素晴らしい教育者を失ってしまった。

最近では毎年のように「創発システムシンポジウム」が富山で行われている。会議の合間によく会場の近くの温泉に一緒に行った。風呂から出た後に、おいしそうにアイスクリームを食べている湯浅先生が、今でも目に浮かぶ。

写真(次頁)：平成14年8月に行われた創発システム・シンポジウムでの写真  
(前列右から5人目が湯浅先生, その二人右が筆者)





## 湯浅秀男さんを偲ぶ

東京工業大学大学院総合理工学研究科 知能システム科学専攻  
旧所属:名古屋大学工学部 自動制御研究施設  
伊藤正美研究室(昭和44年年度修士卒業)  
伊藤 宏司

湯浅さんとは、科研重点領域研究「自律分散システム」(1991-1993)、同「創発システム」(1995-1997)、および理研バイオメテックコントロール研究センターのチームリーダー時代(1993-1996)を通して、いつもともに研究し議論してきた。年齢は離れていても、研究者として楽しい議論仲間であり、またいつも示唆を与えられていた。

いま手元に湯浅さんの博士論文「自律分散システムにおける協調と大域的秩序形成」(名古屋大学、1991)がある。システム科学の立場から、部分(サブシステム)と全体(大域的秩序)の関係を理論的に扱った世界で初めての論文である。湯浅さんは、サブシステム間の相互作用からシステム全体の秩序を規定する理論を自ら導出するとともに、その理論を動物の遊泳や歩行といった移動パターンの生成と変化に応用している。すでに10年以上経っているにもかかわらず、その新鮮な考え方や理論は少しも古くなっていない。いまでも、この分野を手がける研究者が一度は参考にする博士論文である。湯浅さんは最近この理論を発展させ、グラフ理論を使って離散システムとの融合をはかろうとしていた。今後のシステム理論にとってきわめて重要になる手法を手がけ始めたところで、本人もおもしろくなってきましたと言っていた。研究者仲間もその成果を楽しんでいた。私たちはシステム科学にとってきわめて貴重な人を失ってしまった。本当に残念である。心からご冥福をお祈り致します。

先生に初めてお会いしたのは、科研重点領域研究「創発的機能形成のシステム理論」の合宿の時だったと思います。先生が名古屋大学におられたころです。その後、創発に関する研究会や講演会ではしばしば一緒になりました。いつも穏やかな表情でとつとつと話され、独自の観点から説得力ある議論を展開されました。創発の研究といえば、たいていの研究者は、セルオートマトンや進化計算、強化学習といったシミュレーションを中心とした方法論に拠るのですが、先生は微分方程式による力学モデルの記述から出発するという、いわば理論的アプローチを試みられていました。ある会合で、確か、未来開拓プロジェクト「創発的シンセシスの方法論」に関する会合のコーヒープレイクで、理論的手がかりを得たと嬉しそうに話をしてくださった表情を今でも憶えています。丁度東大に移られた直後だったと思います。

その後昨年6月、私自身も神戸から東大に異動することになり、本郷で精密系の会議で最初にお会いしたとき、縁があるものですね、と言葉を交わしました。私にとりましては、新しい研究環境であゆみ始めたばかりで、同じような研究分野に関心を持っている旧知の友人の一人として、先生を頼りにし、先生とのおつきあいを楽しみにしていた矢先でした。先生のご逝去を知らされた時、言葉に表せないほど驚き、悲しく、無念でした。先生が担当されていた科目マルチエージェントシステムを、私が引き継ぐことになりましたが、学生に慕われ、信頼されていた先生の名講義には、とても及びませんが、力を尽くしたいと心に決めております。湯浅先生、やすらかに眠りください。



新しい情報棟の8階の研究室から、真っ白に雪化粧した北大ポプラ並木が見える。一面の雪景色。また雪が降り出したようだ。かくて季節は繰り返す。あと何回このような季節を迎えることができるのであろうか。平成14年、2002年は忘れられない年になってしまった。人生一寸先は闇。信じられない不幸に友人知人が次々と襲われた。テレビでワールドカップ観戦中に奥様の目の前で突然心臓発作に襲われた50歳の教授、沖縄のホテル滞在中にこれまた心臓発作にて倒れた写真家、肺ガンを宣告され1ヶ月しか延命できなかった大学の同級生、同じく先輩の大学教授。ガンを宣告され後6ヶ月と言われている友人。中でも湯浅先生のケースは何とすればよいのだろう。

遠く北海道にいるがゆえに今でも信じられない。あの湯浅先生の優しい微笑と、もの静かで丁寧な語り口が耳に残り、脳裏にビジュアル化している。本当に湯浅先生がなくなったと言うのは事実なのだろうか。湯浅先生と私は、新井研に平成11年春に参画した同期の桜。私は期限3年付の併任教授、先生は専任の助教授。先生のことは若手研究者として以前から存じあげていたし、平成9年から始まった重点領域研究では、下諏訪などでの泊り込み研究集会で軽く声をかけ合う程度。しかし先生が東大に移られてからは、湯浅先生により親しむようになったと思う。何しろ共同分担した講義は、全部先生に依存していたし、私の講義には皆出席。手ごわい質問など。移られて一年近くにも亘って名古屋での種々の仕事をこなし、かつ東大での新しい仕事:生産の種々の様相を非線形方程式にて連続力学系モデル化する新規アプローチ、その成果に期待していたのだが。準備に時間を要する新しい授業。多くの学生、院生の研究指導、学会の仕事、大学の仕事などなど、何となく力まずにこなしていた。他所ながら先生の健康を気遣ったこと何度もあった。その都度「いや大丈夫ですよ」と何気ない笑顔の忘れがたいことよ。

私が大学院の学生のころとは、自律分散システムに関する研究開発が盛んに行われ始めたころでありまして、湯浅先生との最初の出会いは、先生が書かれていた論文を読ませていただいたことでした。計測自動制御学会で発行されました論文は、自律分散的に歩行システムの歩容パターンを生成するというものであり、私も当時、歩行ロボットを対象に分散制御技術に関心をもっておりましたので、湯浅先生の研究内容に感銘、刺激を受けたことを覚えています。私は現在も、自律分散ロボットシステムに関する研究をさせていただいておりますが、今でも私の中で印象に残っている論文の内の一つであります。

その後、学会の講演会や研究会、研究プロジェクト等での活動を通じておつきあいをさせていただく機会を得ましていろいろ議論させていただきました。湯浅先生の研究されていた理論の分野は、私にとっては少々難しいものでありましたが、質問をさせていただきますと、非常に丁寧にわかりやすく説明してくださいました。これは、湯浅先生の真面目な御人柄がなせるものであろうといつも感心させられました。先生が御指導されました学生の方々と話した際にも、皆さんが先生を非常に信頼し、慕っておられることが感じられました。

先生に最後にお会いしたのは、昨年夏に富山で行われました創発システムシンポジウムの際でした。その際同席させていただいた研究会では 1 研究グループのとりまとめを積極的になされる等、今後のさらなる研究成果の飛躍が期待されておりました。それだけに今回の報をうかがった時には、まったく信じられませんでした。先生が残された業績や開拓された分野を続けて飛躍させるとともに、先生に見ていただいても恥ずかしく無いような研究活動をつづけて行くこととお誓い申し上げまして私追悼の言葉とさせていただきますと思います。御冥福をお祈り申し上げます。どうもありがとうございました。

突然の訃報を受け、愕然としました。考えることができないことでした。湯浅さんとは古いつき合いです。研究分野がシステム制御論で同じであり、また彼は(故)伊藤正美先生の愛弟子でもあり、私自身も伊藤先生には大変なご指導を賜った関係もありました。文部省の重点領域研究「自律分散システム」が始まったころより、湯浅さんの研究成果は関連研究者の注目を引くようになりました。そしてそれに続いて重点領域研究「創発システム」が開始され、このグループで彼は中堅研究者として、ロボットの歩行パターン生成などに非常にユニークな理論を展開されました。そして東京大学へ転任され、我国を代表的する研究者に成長されることを期待していたところでした。

誠に痛恨きわまることになってしまいましたが、先生にお教えを受けられた方々により、その意思がつながれていくことを祈ってやみません。

湯浅先生には特に自律分散システムの重点領域研究において、先生の研究成果が大きな柱の一つとして全体を支えてくださったので、大変お世話になりました。ちょうど、先生の馬の歩容の研究が軌道に乗ってきて、いろいろな歩容をエネルギーが最小になるという原理で 捉えて説明されたのが先生のイメージとして強く脳裏に焼き付けられています。

計測自動制御学会の自律分散システム部会でも終始主要メンバーとして、また幹事として活躍され、お会いする頻度も高くなりました。次第に、会合の帰りには阿吽の呼吸で伊藤正美先生や、北村新三先生その他何人かで喉を潤すというのが慣わしになりました。

重点領域研究の創発システムが終わってからはややお会いする機会が少なくなっていました。が、先生が東京大学に移られたということを知り、大変うれしかったことを思い出します。精密機械工学専攻ということで、前にいた計数工学と隣り合わせのビルという親近感もあり、早く本郷でお会いして、あの辺で一杯やりたいと考えていました。独りよがりなのですが、それが湯浅先生が東大へ移られたのを喜び申し上げる最適な表現と感じていました。それがなかなか果たせず3年も経ってしまい、しかももうそれができなくなってしまったとは痛恨の極みです。

先生は馬の4足歩行もそうですが、そして、システム／制御／情報学会誌(第43巻 第9号)にも書いておられますように、物理とシステム工学の統合を目指した理論ということ を 標榜しておられました。それが既存のシステムを理解するにも、新しいシステムを設計するにも、一貫した先生の考え方で、自律分散システム、創発システムの研究においても重要な指導原理のひとつになっています。これは工学にとって非常に重要なことで、大いに賛同しています。及ばずながらも微力を尽くしたく考えておりますので、先生、どうか安らかに眠りください。

合掌。

私が初めて湯浅先生にお会いしたのは第2回の自律分散システムシンポジウムだったと記憶しています。当時薬学部の大学院生で計測自動制御学会のシンポジウムなど初めての参加であった私に、大変緊張していたところに、優しく声をかけていただき、時間を忘れて議論したことを昨日のことに覚えています。この出会いこそが、今日の研究にとって一つの重要な出発点であったことは間違いありません。

小生がいつも感銘を受けていたことのひとつが、先生の学会でのコメントでした。先生はいつも、深く傾きながら話を聞いていらして、いつも相手の話を最大限にくみ取った上で、大変適切なコメントをなさる方でした。相手のことを気づかいつつ、その意図をくみ取った上で、新しい示唆を与えることで相手を適切に導くという姿勢にいつも感銘を受け、自分もいつか先生のような人物になりたいと思っておりました。こうして、いつしか制御関係の学会では、先生にお会いすることが、学会に参加する楽しみの一つになっていったのでした。

初夏の北海道で計測自動制御学会が開かれたときのことだったと思います。その年は何年に一度という猛暑でした。また懇親会が開かれたジンギスカン会場がこれまたすさまじい熱気。というわけで途中で2次会をとということになったのですが、甘党の先生はアイスクリームを注文されました。「えっ、アイスクリームですか？」という我々に先生は一言「やっぱ風呂上がりはアイスクリームでしょう。」その時以来「風呂上がりはアイスクリーム」は仲間内での合言葉になったのでした。

こうして思い出しますと、湯浅先生には非常にたくさんの事を教えていただき、自分にとってかえがたい良き先生、良き先輩であり、良き友であったと思います。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

湯浅秀男先生の急逝は、本当に衝撃でありました。

湯浅先生と私は、私が博士課程のとき、文部省(当時)科学研究費の重点領域研究における研究会でのことでありました。高度に数学的な理論を様々な事象へ応用してみせて下さった先生は、難しい事象を実に丁寧に、分かりやすく学生の我々にも説明してくださいました。他に代わるものがない存在でありながら、あくまで人当たり優しく、真摯な姿勢を貫く姿に、大学教官の理想像を見た思いでした。その後、計測自動制御学会の諸行事、あるいは新たな研究領域を切り開くための勉強会などでご同席させていただきました。何時もクリアな数学モデルに基づいて、現実の現象をガッチリとらえていく先生の姿を拝見することができました。

つい昨年の8月には、富山で行われたシンポジウムへの往復を、同じ車に乗って同行させていただきました。片道6時間近いロングドライブでしたが、その途中において、先生と硬軟とりまぜた様々な会話を楽しめたことが昨日のように思い出されます。実は、一昨年も同様に富山への行程をご一緒させていただきましたが、湯浅先生は朝の待ち合わせにも決して遅れたりすることがなく、まさに無欠の人でありました。シンポジウムを終えての帰り道、富山のレストランで旨い魚に舌鼓を打った、あの湯浅先生がもうおられないということがいまだに信じられません。

湯浅先生を失ってみて、私(達)がいかに湯浅先生の慧眼にすがって世の中を知り、先生の頭脳を借りて現象を理解していたかを思い知らされた気持ちです。湯浅先生を失われたことは、ご家族ご友人の方々にとって大変な悲しみであると同時に、私のような未熟者にとって大変な試練と言わざるを得ません。先生の残して下さった多くの財産を胸に、一人立ちできるよう努力していきたいと思えます。

湯浅秀男先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

研究で湯浅先生が一番活躍されていたのは(社)計測自動制御学会システム情報部門自律分散システム部会であったと思う。この部会の運営委員を長年に渡り勤めていただいた。2002年度の運営委員会主査として追悼文を捧げたい。

自律分散システムに関する研究には、大きく分けると理論研究と応用研究がある。先生は前者を専門とし、数式に基づいた自律分散原理の探求を専門としていた。研究会でも、そのような観点からの発言が多く、本部会として必要不可欠なメンバーであった。

先生の研究は動物の歩行の秘密を明かす所から始まった。馬であれば4つの脚がそれぞれリズムを持ちながら、そのリズムが共鳴して歩行を実現する秘密の探求である。歩行速度に応じて、このリズムの共鳴が変わり、並足や早足などの走り方の違いに結びつくというご研究でした。この研究で、計測自動制御学会の論文賞を受賞されたと思います。

その後、物質が徐々に広がる拡散現象を数式で表した拡散方程式と呼ばれる偏微分方程式を用いて自律分散システム原理を説明することに興味を持たれました。それを通じて、徐々に、自律分散システムの「場」という概念を深められたと思います。空間に置かれた物が場を作り、その場が物の挙動に影響を与えるという複雑な話です。その研究をベースに、沢山のロボットが協調して運搬などの仕事をするという群ロボットの研究に進まれました。この研究は、多数の空気分子の動きを真似してロボットが仕事をするという統計力学と自律分散システムを結びつける斬新なアイデアに基づくものでした。

以上の研究活動に加えて、2002年東大で開催された自律分散システムシンポジウムの運営など、本部会のアクティビティを高める活動を積極的にサポートして頂きました。亡くなられたことは非常に残念です。本部会を代表して哀悼の辞を捧げるとともに、ご冥福をお祈りします。

湯浅秀男先生との出会いは、二年前の冬に仙台(東北大学電気通信研究所;矢野雅文教授主催)で開催された共同研究プロジェクトの討論会(現在の「移動知」研究会)でのことでした。医学部で神経生理の研究と教育に明け暮れていた私にとって、この研究会に出席なされて居られた工学系の先生方との討論は非常に刺激的で創造性豊かなものでありました。その中に湯浅先生が居られました。湯浅先生は静かに会議全体のポイントを的確に取りまとめる作業をしておりました。今年の冬、湯浅先生から一本の電話が入りました。SICE 研究会を立ち上げることになり、私にも是非参加して戴きたい旨の御連絡を戴きました。丁度私はその頃体調を崩しており、十分に御要望に答える自信が無く、一度お断りしました。しかし、もう一度湯浅先生から電話が入り、どうしても私に参加して戴きたいという非常に熱心で真摯なお言葉に、私は「喜んで参加させていただきます」と答えたのを覚えています。私と湯浅先生と接点はこれが最後でした。

その後、私はうつ症状に悩まされ、この病気特有の生きる希望をなくす症状と暫く戦うことになりましたが、湯浅先生がお亡くなりになられたことを知ったのは、そんな矢先でした。大変ショックでした。研究会のメンバーの中でもほぼ同年代であるということで、非常に親近感をもっており、もっと色々なことを教えて頂きたいと思っておりました。湯浅先生は非常に責任感が強く、また人の輪をととも大切にされる方で、私は今でも「事を成す上で、本当に必要な、そして必ず世の中の役に立てる人物」という思いを持っています。道半ばで倒れた湯浅先生の無念さを思うと非常に残念でなりません。

御冥福をお祈り致します。

神戸大学工学部情報知能工学科  
特定非営利活動法人国際レスキューシステム研究機構  
田所 諭

突然の訃報に接し、本当に驚きました。あんなにお元気な様子だったのに、なぜこんなことになったのか、全く理解できません。今も、先生の笑顔が目に浮かびます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



湯浅さんと初めてお会いしたのは科研重点領域研究「自律分散システム」の頃であった。この重点領域研究は湯浅さんの恩師である伊藤正美先生(故人、名古屋大学名誉教授)が代表をなさっており、私も伊藤先生にお誘いいただき参加し、時折名古屋大学の伊藤先生の研究室にお邪魔し、議論をさせていただいていた。その頃湯浅さんは大学院の学生であったが、いつもその議論に加わっておられた。私は湯浅さんの議論の数理的なキレのよさに感心し、得られるところも多く、彼との議論を楽しんだ。伊藤先生も湯浅さんの才能を高く評価されており、彼の議論を楽しそうに聞いておられた。ある時、「湯浅君は、絵も上手なんですよ」と一枚の OHP を持ってこられた。その隅っこにはウォークで歩いている子猫が描かれていたが、丸々として少し恥ずかしそうに歩いているその子猫は湯浅さんに似ていなくもなかった…。

以来湯浅さんとは色々な研究会でお会いし議論を楽しむこととなった。そして今年の夏、富山での"創発夏の学校"でお会いし、長い長い立ち話の後、「次は、来年新春、仙台の自律分散シンポジウムで」とお別れしたのが最後の議論となった。最近、湯浅さんは創発的に機能を形成するシステムの数理に深く関心を寄せておられ、そのダイナミクスをある双対的な形式で表現する試みを始めておられた。この試みは(最終的に成功するかどうかは、まだよく解らないけれども)魅力的な試みと感じた。どなたか若い方がこの試みを引き継がれれば、私も興味を持ってその議論に参加したいと思うし、そして、多分そこには、湯浅さんも確固たる存在感を持って議論に参加されるだろうと思う。

ご冥福をお祈りいたします。

湯浅秀男君がなくなってまだ1周忌にもならない今、湯浅君がどうして東京大学に来たかを書くのはまだ早すぎるかも知れない。

精密機械工学専攻では1998年からそれまでの小講座をユニットする考え方から、もっと大きな単位で活動することを計画した。つまり、3名程度でユニットを構築し、それぞれの教官は補完的に分野を担当すると同時に新しい研究分野の導入を心がけるという方針であった。生産システム応用を常に考えている我がロボット研究室としては、これからは理論的な裏打ちのあるシステムが求められ、その中でも特に自律分散システムが重要となると考えた。湯浅君が候補としてあがった。

湯浅君とは自律分散システム研究でご一緒した。難しい理論を導入しながらも、いつもニコニコ笑って説明してくれる頭のよい人だなというのが第一印象であった。1997年にBerlinで開催されたISADSに、湯浅夫人律子さんも家内も共に参加した。そんなことから研究も性格もよく知っている湯浅君に、我が研究室のグループに参加してもらうことを計画したのである。お願いの仕方は単刀直入であった。私が湯浅君に電話をして、事情を説明した。湯浅君は考えてみると言ってくれた。本人が名古屋育ちで、律子夫人も名古屋の人である。それだけに、名古屋を離れることにきっと躊躇したのだろうと思う。しかし、「研究分野の近い人がいることが魅力です」と東京大学への異動を決めてくれた。

1999年4月、湯浅君は東京に移った。東大へ転勤してきた教官が公務員宿舎を申し込んでも、遠いところしかないのが普通である。しかし、湯浅君の場合は大変運がよかった。東久留米の話があって、またすぐに方南町の話がきた。「名古屋の人間には分かりませんから、先生、決めてください。」と言われて、私も困ったが、より東京らしい中野区を選んだ。

そこから湯浅君は毎日、本郷へと通ってきた。昼と夜はいつも学生と共に本郷界隈の食堂を順番に食べて回った。その中でも森川町食堂がお好みだった。私も夜遅くまで大学に残るときには、共に晩御飯に出かけた。湯浅君はいつも楽しそうに研究の話、学生の話をしてくれた。

湯浅君の我々の研究室へ参画はすぐに良い影響を与えてくれた。北大の嘉数侑昇教授も客員教授として研究室を支援してくれたので、4教官で研究分野の構築について議論をした。生産技術とソフトウェア、ロボットと自律系、効率追求と頑健追求、湯浅君は常に明晰な解釈を与えてくれた。その後、学生にも恵まれ、湯浅君の研究は大幅に進みだした。自律分散の画像処理、ロボットの動作計画への応用、信号機制御、みな収穫の時期を迎え始めた研究であった。

湯浅君は1999年に東京大学へ移った。2002年9月、一人逝ってしまった。3年半の短さだったが、残したものは大きい。しかし、もっと共に研究の道を歩みたかった。

湯浅先生と初めてお会いしたのは、1999年4月に開かれた精密のこの年度における第1回教室会議の席であった。湯浅先生と筆者とは、研究室はもちろん研究領域も異なる上、年齢も筆者が20歳ほど年長ということなどから、その接点はそれほど多くはなかった。にもかかわらず、私はそのとき以来、彼には何ともいえない親しみを覚えていた。それは、両者ともこの時に東大教官として赴任したことに加えて、湯浅先生は名古屋大学、筆者は大阪大学と、東大出身者でないことによるという点もあるが、それ以上に初めて言葉を交わしたときの彼のえも言われぬ笑顔が私の胸に焼き付いていたことが大きく、今でも忘れられない。

前述のように湯浅先生との接点はそれほどはなかったため、教室会議や卒業論文・修士論文の発表会などを除き、ともに仕事をしたことは数えるほどであったが、そのなかで大学院特別研究の審査会で二、三度ご一緒したときの印象が深く残っている。紙面の都合上、詳しい内容を述べる余裕はないが、それは、一言でいって学生に対するやさしさと思いやりのある指導であった。すなわち質問をするにせよ、課題を出すにせよ、教育的配慮が随所に溢れており、年上の筆者が見習わなければならないと思ったほどである。

湯浅先生の訃報に接してから、早くも4カ月が経とうとしているが、いま大学は、独立行政法人化への移行や新しい大学院のあり方など、その教育・研究環境は大きく変化しようとしている。筆者は間もなく定年退官を迎えるためまったく無力であるが、他の教官の方々や湯浅先生の教えを受けた学生・後輩の方々には、途半ばにして夭折された先生の魂を慰め、心安らかにお眠りいただくよう、それぞれの研究などを通じて、精密機械工学専攻と東大、ひいてはわが国の学術発展のために尽くしていただくことを願いたい。

先生が1999年に東京大学に着任され、私と同じ研究グループに属するようになってから、多くのことを教えていただいた。先生のやさしいお人柄については、改めて書くまでもない。ここで私が記そうと考えているのは、先生が研究のあり方について何をお考えになっていたか、である。これは、先生との数年間の交流のうちに、多少わかるようになった(気がしている)ものである。先生の主張(の一つ)を私の理解により解釈すれば、「従来からのアルゴリズムの提案研究はもう飽きた。きちんとした定理を見つける研究の方が重要である」というものであった。誤解のないように付け加えると、これは決してアルゴリズムの研究を軽視しているものではない。ある適当な(身勝手な)問題設定のもとで何も保証できない(うまく行くか行かないかわからない)適当なアルゴリズム(例えばロボットの行動則とか学習則等に関するもの)を提案しても、それによって何かが明らかになったわけではなく、学術的意味がわかりにくい、ということである(もちろん上記の範疇に含まれないアルゴリズムの研究も多く存在する)。それよりは、多少地味であっても研究上の前進が明確である研究の方が意味がある、という立場であった。現象論的にこういうことらしい、ということに留まらずに、それはあらゆる場合に本当か、真に明らかになっているのは何か、を重視する姿勢は、大変勉強になった。

先生がこちらにいらしてから暫くして、私は恐れ多くも先生に「自律分散系の理論的研究者である先生と、移動ロボットの協調を行っている私は、群知能ロボット系設計論に関して何かを打ち立てる責任があるではないでしょうか」と尋ねたことがある。その時先生は間髪いれずに「うん。絶対そうですよね。」と返答して下さいました。それを契機に始まった研究プロジェクトがまだ実を結ばないうちに先生は逝ってしまわれた。私の努めは、そのプロジェクトを成功させ、成果を出すことであると考えている。

私は1999年の4月1日に精密機械工学専攻に赴任しました。4月8日の教室会議では外国から来たハウデンさんをはじめ5人が新任の挨拶をしました。私と湯浅先生は新任挨拶仲間でした。メールシステムを担当した湯浅先生に、大学のアドレスが立ち上がるまで、自宅への転送をお願いしたのがお話しするきっかけでした。居室が同じ11階の並びで、会議の行き帰りによく顔を合わせる機会に恵まれました。論文審査の議論などを通して拡散現象と強く関連した分散協調システムの理論や自律分散系の動作モードの理論など読みごたえのある興味深い話を伺うことが出来ました。

その年の12月9日の精工会忘年会の席で、「子供が2歳になる、今夜はこれから名古屋へ帰るのだ。」と嬉しそうに話されていました。以後、子供の話が話題に上るようになりました。ある時、「可愛がるばかりでなくしっかりとした躰も必要だと言われた。」と戸惑ったような表情で話されました。私は先輩風を吹かせて、子供は毎日々々驚くほどに可愛さが増し、テリブルツートと呼ばれる歩き始めのミニ反抗期の後には、可愛い盛りの片言の3歳になる。自己主張の始まる小学2年の反抗期から中学そして高校と体は大きいが中身は子供のままあつという間に成長していく。スキンシップで目一杯可愛がっても可愛がりすぎることは無い。三つ子の魂・・・と言われるように性格は3人3様だが、幼児の頃親と一緒に遊ぶ時間の長かった子供は、大人になってもどこかでそれを覚えているところがある・・・とお話しました。黙って聞いておられた湯浅先生は嬉しそうに、「そうですか、可愛がりすぎることはありませんか！それは良かった。」と我が意を得たりの表情でした。あの時の子煩悩な笑顔が今も忘れられません。

衷心よりご冥福をお祈りいたします。

湯浅先生とは、大学の仕事や行事を通じてしか、お付き合いをさせていただく機会がありませんでしたが、大学の論文審査の時には、湯浅先生の指導された論文を査読させていただく機会が多かったように思います。大変しっかりした論文ばかりで、湯浅先生が熱心に指導され、また、学生が何とかそれに応えて努力している様子が、論文から伝わってきました。内容的にも、大変勉強になり、楽しみでもありました。また、私の指導した論文を湯浅先生に読んでいただくことも少なくなかったと思いますが、逆に稚拙な論文を実に丁寧にお読みいただき、貴重なサジェスションも沢山いただきました。

その他にも教務の仕事なども一緒しましたが、そんなことばかりでなく、湯浅先生とは、ゆっくりと時間をとって、様々なことをディスカッションしたり、教えていただく機会を持ちたいと思っておりました。湯浅先生が、優れた研究者であるばかりでなく、多方面に造詣の深い教養人であることも感じておりましたので、きっとそれは私にとって貴重なものとなっただろうと思いますが、今となっては、それも叶わぬ夢となり、大変残念です。

ご家族を残されて、また、学究の道半ばにして旅立たれた先生のご無念を思うと、心が痛みます。私たちにとっても大きな損失であることを痛感しています。この思いを胸に刻み、これから研究や仕事につくして行きたいと思っておりますので、どうぞ、いつまでも私達をお見守り下さい。

湯浅先生、どうか安らかに眠りください。

湯浅先生とは私が精密の事務主任に就任した2000年4月からの付き合いでわずか2年半足らずでしかありません。私は事務主任として教室会議に出席させていただいており、先生は2000年度、2001年度と議事録の担当をされておられたので隣の席になり、そのこともあって親しく声をかけていただきました。穏やかな中にきちんとと言うべきことは言うという強さを秘めておられ、また、教官、職員のわけ隔てなく対応していただけるやさしさ、気遣いを本当にうれしく感じていました。先生はスポーツも得意であると聞き及んでいましたが残念なことに一緒にプレーをするという機会にめぐまれませんでした。私は下手の横好きでバドミントン、バレー、サッカーなど何でも屋です。何かのスポーツで一度は対戦してみたかったと悔やんでいます。

二人目のお嬢さんがお生まれになり、うれしそうにご報告いただいたあのときの先生の笑顔がまだ強く記憶に残っています。大事な奥様とまだ幼い二人のかわいいお嬢さんを後に残して亡くなられた先生の無念さは計り知れないものがあると思います。

法人化を初めとする「大学改革」で先生方が毎日ご多忙な日々を過ごされていることに危惧を抱いていたのは私だけではないと思います。多くの職員も恒常的な残業を余儀なくされています。私のように少しでも体調が悪ければ休むといったことはなかなか出来ないのが現状ですが、先生の死を無駄にしないためにも残された私達は健康には充分注意していかなければならないと思います。

研究・教育の面では先生のご意志を継ぐことはかないませんが、子ども達のために明るい未来を造っていくことには何とか役立っていきたいと思っています。

私と湯浅先生とは、1999年4月に東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻に移動してきて、”中途入社”ではありますが、いわば”同期入社”の間柄でした。家も同じ方向であるため、朝大学に行く時に、よく南北線四谷駅のホームでお会いしました。帽子をかぶると雰囲気が変わるため、最初は似て非なる人と思っていたくらいです。

学科内の役割分担では、同じような任務をすることが多く、大学院の入試雑務を行う委員（EX委員という）を2年間一緒に行いました。これは、大学院の入試の採点結果を集計して、研究室の配属先を決定する委員会です。それはいつも11階にある湯浅先生の部屋で行いましたが、先生は極めて緻密に業務を遂行されました。大学院の入試会関係に関しては、いろいろと専攻内で取り決めた規則が複雑になっていたのですが、湯浅先生が整理をされて、大幅に見通しが良くなりました。先生の作られたファイル類はすべて私が引き継いでおりまして、大変役立たせていただいています。

昨年の新年会の際にたまたま隣に合わせになりまして、子供のおもちゃの話になりました。我が家も全体が子供のおもちゃ箱のような状態になっており、じゃまな物は隠して捨ててしまうと言う話をしました。すると、湯浅先生のお宅はお子さん（範子さんでしょうか）が小さいので、小石やら小枝を拾ってきてこれらがいっぱいあるけれども、捨ててしまうともものすごく怒られるので捨てられないと言われていたのを思い出します。

湯浅先生とはなぜか生活パターンが似通ってしまっていて、東大正門前の朝日屋（そば屋）や森川町食堂で毎週1回はお会いしたと記憶しています。最後にお会いしたのも、実は朝日屋で、そのときはお一人で食事をされていました。

このところ、いろいろな学会誌で、至る所で湯浅先生が執筆されているのを拝見しまして、当該分野の第一人者として活躍されていると感じていた矢先の訃報でした。湯浅先生も志半ばにしてさぞ無念であったと思われます。ご冥福をお祈りいたします。



私は、1999年4月に湯浅先生と一緒に東京大学大学院工学系研究科部精密機械専攻に赴任しました。当時は、2000年4月に新たにできる学科「システム創成学科」の検討が激しく行われており、我々もその議論の中に入りました。

我々が参加したのは、システム創成学科の「知能社会システムコース」で、そこでは、技術の分野に縛られない新しい工学教育をどのようにするかという、参考とすべき前例がない取り組みを行いました。

時には、泊り込みで議論したり、酒を交わしながらぼやいたりしながら、社会や学生が求める教育とはなんだろうか、といった大上段の議論もやっていました。

このような本当に基本的な議論をした上で、具体的には、問題解決型の演習を行おうといったアイデア(湯浅先生は名古屋大学で行ったPBL(Project Based Learning)の話をよくされていました)、インターンシップや海外での研修に単位を与えること、学生による授業評価など、新しい取り組みを採用することができました。これも湯浅先生のご経験や教育に対する明確な考え方があったからだと思っています。

これらの取り組みは小さな一歩だと思いますが、これから独立行政法人化などで変わらざるを得ない大学を見ると、非常に大きな影響を大学教育に与えていくと思います。

湯浅先生の思いは、このようなところでも生きていくと思います。

湯浅先生の日常で印象深い思い出は、まず、会議のときの食事風景です。精密の教室会議は昼休みから始まるため、多くの教官がコンビニ弁当を買ってきて、会議中に食事を済ませます。湯浅先生がいつも召し上がっていたのは、フランスパンでした。口を大きく開け、目は一心に資料を追いながらパンにかじりついておられました。一度お尋ねしたことがあります。「先生は、いつもおかずなしで、フランスパンを食べていらっしやいますね」、「ええ、私はおなか膨れれば、パンでも草でもいいんです。ひつじや馬みたいなものです」とニコニコしながらお答えになりました。今思えば、硬いフランスパンを何度も噛みしめることで、神経を集中させ、思考を高めていたのでしょう。先生の優れた頭脳は、そのような日常の行いの積み重ねによるものかもしれません。

また、博士論文の審査でご一緒したこともありました。理論中心の研究では、先生はよく副査をされていました。ご専門以外の研究に対しても、高度な数式をきちんと理解し、適切なコメントをされていました。いつも穏やかで優しい表情の先生ですが、審査には一転して厳しい表情をお見せになります。あるとき、発表者の学生が、理論の不備を先生に指摘されて、問答に窮したことがありました。先生のお顔には、その学生を案じ「何とかうまく答えてくれ」という表情が浮かんでいました。学生の回答は、決して満足できるものではなかったのですが、先生はいつもの穏やかな表情に戻り、「それでもよいが、こう考えたらもっとよいと思う。」と助け舟を出されました。教育者として、厳しさと優しさを兼ね備えているそのお姿に、心底感心した思い出です。

先生を失った悲しみは、どうても埋めることはできません。しかし教育者、研究者として、また、人間的にもすぐれた湯浅先生とご一緒できたことを誇りとして、私はいつまでも記憶にとどめておきます

湯浅先生とのお付き合いは、1999年の6月に、私が東大の新井・湯浅・太田研究室に赴任したときから始まりました。圧倒的な学識をお持ちでありながら、まるで経験の浅い私にも、対等な立場で接して下さる湯浅先生に、いつも頭が下がる思いでした。また一方で、先生のお言葉の端々からは研究への純粹で厳しい姿勢が垣間見えて、笑顔の先生の前で思わず襟を正すことも一度ならずありました。

3年あまりの間、湯浅先生のすぐ近くでご指導を賜りましたが、あまりにも突然な先生のご逝去に接して、お力に十分なれないうちにお別れすることになってしまったことが悔やまれます。それと同時に、もっとたくさんのことを先生から学びたかった、という思いでいっぱいです。心より哀悼の意を表します。

湯浅秀男先生が私たちに大きな悲しみを残して他界されてから、まだ半年も経っていません。自律分散システムの研究分野におけるリーダーとして、まさにこれからという時であっただけに、残念至極であります。周囲の学生や同僚、研究者仲間への影響は計り知れません。なぜこんなに早く逝ってしまわれたのか、いまだに天の采配をうらまずにはられません。

湯浅先生は職場では私の隣の部屋にいらっしゃいました。したがって急ぐときは、電話やメールよりはノックがしばしば交信の合図になります。私より1年前に名古屋から赴任され、同郷？のよしみ(私も名古屋から移動しました)もあってか、とても親しくして頂きました。私の着任直後は毎回のように、会議の開催場所へ案内をして下さいましたし、時に会議をサボろうかななどとメゲているときには、そんな時に限って大抵ノックがあり、"一緒に行きましょう"などと誘いに来てくれて、うれしいやら、つらいやら・・・、今思い返しますと本当にありがたいことでした。特に去年は様々なドキュメントの作成などありまして、湯浅先生には自ら応援を申し出ていただくなど大変お世話になりました。

奥様の律子さん、お母様、弟さんの湯浅敏男さんを始めご遺族の方々の悲しみは如何ばかりかと察せられます。これまでも増して健康に留意され、天国の秀男さんと共に幼いお子様を守ってください。

幼子を残して逝った湯浅先生、生まれたばかりの令子ちゃんのお顔も見ないまま亡くなったのは痛ましい限りです。未練がましいようですが、安らかに眠りたまえとは言えません。姿は変わっても宇宙のどこかで範子ちゃんと令子ちゃんの行く末を見守っていてほしいのです。お子様方はお父様の導きによって"宇宙の子"として逞しく育っていくことと信じております。湯浅先生、私どもの深い感謝と限りない惜別の悲しみを受けてください。先生は私どもの胸の中に永遠に生き続けています。

だいぶ時間が過ぎたのに、まだ何だか実感が伴ってきません。

湯浅先生が東大にいらっしゃった時には、私は既に新井研究室を卒業して数年経っていました。新井研のところに外部から先生がいらしゃると聞き、さてどんな方だろうと興味津々だったのを覚えています。はじめてお会いした第一印象は、案外普通の方だな、というものでした。それから先、新井研の研究会などでお会いする機会を重ねるに従い、この方は2つの点で全然普通の方ではないんだということを身にしみて感じるようになった次第です。湯浅先生をご存知の方は皆さんご理解されていることと思いますが、一点は湯浅先生の卓越した研究能力、そしてもう一点は、湯浅先生の性格の良さ、特に謙虚さです。概して能力が高い人は高飛車なところがあったり、鼻につくところがあったりすることがままありますが、湯浅先生にはそういったところが全くありませんでした。研究会などで湯浅先生が指導された学生の発表に対して私が好き勝手な質問やコメントをした時にも、湯浅先生はうんうんうなずきながら、穏やかに聞いて下さっていたのが思い出されます。新井研の研究会では、レベルが高く示唆に富み、かつ我々にもわかりやすくお話下さる湯浅先生の発表が、正直一番楽しみでした。もう2度と聞くことはできないのですね。もともと研究のことを教えて頂きたかったし、教育のこともお話したかったし(湯浅先生には私が現在所属する中央大学工学部精密機械工学科でも兼任講師をして頂きました)、馬鹿話もしたかった。

湯浅先生の遺伝子は、ご家族の方々のみならず、先生が直接ご指導された学生、そして我々湯浅先生に少なからず影響を受けた者達に脈々と受け継がれていくと思います。我々は湯浅先生のことをずっと忘れません。

湯浅先生には卒論始め、授業等でも大変お世話になりました。

とりわけ、卒論では指導教官として懇切丁寧にご指導頂き、言葉ではとても書き尽くすことにはできないほどの感謝の気持ちで胸がいっぱいです。本当は私などにかまっている時間はないほどご多忙な生活を送っておられたと思います。しかし、私が研究に行き詰まり先生の部屋に質問などしに行きますと、いつも笑顔で迎えて下さり、本当に少しも嫌な顔などされず資料を調べ、丁寧に教えて下さいました。私の努力不足でなかなか研究会の資料ができず締め切りを過ぎて夜遅くに先生の部屋に持っていったこともありました。そんな時であっても、「大変だね。ご苦労さま」と労をねぎらって下さり、優しくアドバイスして下さいました。しかも、そのアドバイスは的確で、私が卒業できたのも湯浅先生のおかげだと思わずにおれません。

また、授業でも、湯浅先生の授業は「なんとか学生に理解してもらいたい」という先生の熱意が伝わってくるような、大変わかりやすい授業でした。レポート課題もポイントをついた問題ばかりで、湯浅先生の授業を受講できた学生は私を含め本当に幸せだったと思います。

湯浅先生は博学なのは勿論ですが、とても学生おもいの優しい先生で一人の人間としても大変尊敬できる立派な先生でした。卒業研究、授業等湯浅先生から教えて頂いたことは私の人生の中で欠かすことのできない貴重な財産になることはまちがいありません。今後も、先生から教えて頂いたことを活かし、社会に貢献していきたいと思います。先生、本当にありがとうございました。

湯浅先生が東大に移ってこられたのは、私が修士課程から博士課程に進学するときでした。以来、スウェーデンでのロボカップ参加にて現地でのプログラム開発を手伝っていただいたのを始め、私自身の研究だけでなくロボカップグループの研究に関しても、湯浅先生には定期的に相談に乗っていただいていたと思います。

最も強く印象に残っているのは、その年の夏に湯浅先生と初めて私自身の研究の相談をしたことです。それまで私は、自分のやりたい研究について、どのように具体的なアプローチを取ればよいかかわからず、周囲の人に自分の興味ややりたいことを伝えるのにもひどく苦労していました。そのとき湯浅先生は、抽象的でややもするとつかみ所のない私の話をすんなりと汲み取り、数学的に整理された表現で捉え直されました。私はそのことに非常に驚き、面白そうですね、といただいていたことをとても嬉しく思いました。

湯浅先生はそのとき、うんうんとうなずき、私も以前からそれに近いことをやろうと思いがちなかなかできなかったのですが、一緒に考えましょう、とおっしゃいました。今から思うとそれは、最期の一年くらいに先生が形にされ始めた、センサとアクチュエータの双対性に関する議論のことだったと思います(余談ですが、やりたいこと(研究)はいろいろあるんだけど、なかなか時間が取れないんだよね、とおっしゃるのがその頃の先生の口癖になっていました)。

その日から、博士課程の研究を経て理研にて新しい課題に取り組もうとする昨夏まで、湯浅先生との相談は、好奇心をかきたてられるのと難しさに頭を悩ませるのと半々でした。それには、私の理解が追いつかないこともあり、私と先生とで志向するものが完全に同じではなかったこともあると思います。けれども、先生の講義を聴いたり、先生と議論したりするときのわくわくする気持ちは、今も忘れません。

すぐに先生の真似をすることはできませんが、先生の研究の魅力を自分なりに理解し、少しでも多くの部分を自分の研究に反映させられるよう努力したいと思っています。

富士通研究所 計測制御システム研究部  
旧所属: 東京大学新井研究室(平成 10 年度博士修了)  
佐々木 順

湯浅先生が東大にいらしたのは平成 11 年 4 月ですから、私が研究室を離れたのとちょうど入れ替わりになります。就職直後の私は、出張の帰りがけや論文生への差し入れと称して何度も研究室に行っており、我が物顔で研究室のお茶飲みコーナーに陣取っていました。湯浅先生にとってはうるさい存在だったかもしれませんが、お会いするたびに気さくに应对して下さいました。その人当たりの柔らかさが、湯浅先生に関する私の第一印象でした。

就職によって一旦ロボティクスから離れた私にとって、湯浅先生の研究に触れる機会は、毎年夏に行われる研究室のミニ論文発表会がほとんど唯一のものでした。反応拡散方程式をベースにした自律分散システムの設計に関する先生のお話は、優しい語り口と豊富なたとえ話で、門外漢の私にも入りやすい話だったことを覚えています。講演のその場では、先生が伝えたかったことが理解できるはずもなく、終了後に私はよく先生に「なんか、きつねにつままれたような気がするんですが・・・」と率直に申し上げました。湯浅先生は「あ、ごめんなさい～」と言いつつ、お話の続きをして下さったものです。

私も研究の内外で、人に何かを伝える場面が多々出てきました。その場で思うのは、相手に自分のメッセージが少しでも伝わっていれば、相手から何かしらの質問が出てくるはず、ということです。その反応の多い少ないで、自分の伝える技術の稚拙がわかるのだと思います。日常生活でもうまく伝えられているかどうか危ういのに、最先端の研究内容を相手に伝わるように話す技術は、そう簡単に身につくものでもありません。湯浅先生の持つその技術を学ぶ機会を失ってしまったことは、分野は違えど、同じ研究者の端くれとして、大変残念と言わざるを得ません。

短い間でしたが、本当にありがとうございました。



オリンパス光学工業株式会社  
旧所属:東京大学 新井研究室(平成 13 年度博士課程修了)  
原 光博

湯浅先生が東京大学に着任され、研究室のスタッフになられたとき、私は博士課程 2 年に在籍しておりました。先生が自律分散システムの分野で既に著名な研究をされていたことは良く知られていましたので、期待とともに少し緊張して先生をお迎えしたのを覚えております。大学院に在籍中に、先生の刺激的な講義を受講できたことや研究室の研究会でアドバイスを頂いたこと、先生にスーパーバイザを務めて頂いた勉強会に参加できたことは、私にとってとても大きな財産になりました。講義でも発表の場でも、先生には、難しい内容をやさしく話して頂いたように思います。

先生はとても温厚で物腰の低い方でした。先生に接したことで、偉い人ほど謙虚であるということをつくづく感じることができました。どんな場でも先生が声を張り上げたことは決してありませんでした。ただ、先生の指摘はいつも数理的なバックグラウンドに基づき、的を射たものであったために、穏やかな口調ながら迫力があり、場を引き締める作用があったのだと思います。

研究室生活においては、私共学生と昼食・夕食を共にして下さり、コーヒーを飲みながら気さくに雑談に応じて頂き、夜遅くに共に研究室を後にすることも度々ありました。また、研究室の合宿でサッカーなどのスポーツをしたことなども忘れられません。先生がびっくりするくらい精力的に動き回っていた姿が今も目に焼きついています。

誰もが頼りし慕っていた先生が、まさに、研究者としてご活躍されていた最中に永眠されたことが残念でなりません。湯浅先生のお人柄を偲び、先生にお世話になったことへの感謝の気持ちを込めて、一文を寄せさせて頂きました。心よりご冥福をお祈りいたします。

私は、去年まで研究室でお世話になっておりました。

在学中先生がご病気されたという記憶はなく、元気なイメージしか浮かんできません。訃報を聞いた時そして今現在も、悲しいというより実感が湧かないというのが正直なところです。

特に、春や秋に開かれる合宿に行った時は、サッカーやテニスといったスポーツに積極的に参加し、年の若い僕らが圧倒される程お元気でいらっしゃいました。

そして、研究に対しても、人の物まねではなく新しくオリジナルな分野を開拓しようとする真摯な姿勢を常にお持ちだった事が強く印象に残っております。朝早くから夜遅くまで熱心に研究されている姿には刺激を受け、そして当然今も尊敬の念を頂いております。どんな研究分野の事に対しても造詣が深く、先生のお話には新たな発見と驚きを感じる事ができ、得難い経験・教育を受けているとの思いを日々感じておりました。

又、人格的にも温和で大変優れた方でした。例えば、研究の方向性や実現可能性に悩んだ時には親身に相談にのって頂きました。研究グループが違っていても関わらず、どんな時も嫌な顔一つせず、時間を割いてくださいました。また、制御に関する知識を深めるために勉強会を企画した時は、お忙しい中毎回サポートしてくださりました。難解な理論を分かりやすく説明して頂き感銘を受けた事を覚えております。

先生の存在は偉大で、それだけにこの度は誠に残念ですがご冥福をお祈りいたします。

私と湯浅先生との出会いは、大学院入試のときの面接でした。大学院から新井湯浅太田研にやってきた私は、その面接で3人いらっしやった面接官の先生の名前が分からなかったのですが、そのときにとっても印象深かった先生がいらっしやいました。私が面接で話す内容を熱心に聞いてくださり、そのうえメモまでも一生懸命とってくださっているその先生が湯浅先生でした。研究室に入ってから、湯浅先生とは研究グループが異なり、直接指導していただく機会はありませんでしたが、研究会発表の時に、まだ研究テーマも決まらず暗中模索している私に、分かりやすく説明していただき、研究の指針を指し示してくださいました。また、先生は誰に対してもやさしく、丁寧に指導されている姿が印象的でした。学部生の頃は、“大学には教育者はいなくて研究者しかいない”と思っていた私の考えを覆したのがまさに湯浅先生でした。私のような一学生から見ても、湯浅先生は優れた教育者であり研究者でありました。

また、私は湯浅先生の授業のティーチングアシスタントとしても大変お世話になりました。湯浅先生の授業は学生から人気が高く、分かりやすいと評判でした。懇切丁寧に作られた授業用配布資料やレポート課題は、数学嫌いの学生に興味を持たせるほど、素晴らしいものでした。また、授業中にプロジェクターを通して先生のパソコン画面が映し出されたときに、先生のお子様の写真が教室中に投影されるというハプニングがありました。学生からお子様がかわいいという声があがると、先生はとてもうれしそうにお子様のお話を始められ、そのことを今も懐かしく思い出します。このような小文で湯浅先生への感謝の気持ちや思い出は語り尽くせませんが、以上で追悼文章とさせていただきます。さいごになりましたが、謹んで湯浅先生のご冥福をお祈りいたします。

私は、湯浅先生が名古屋大学から東京大学に移られるのをはさみ、6年間、先生の下で勉強をさせていただきました。本当に貴重な6年間でした。今思い起こすと、湯浅先生について初めに思い出すのは、学部2年生(平成7年)のときに先生が担当された電磁気学の講義です。たいへんわかりやすく教えていただいたのと、湯浅先生が楽しそうに教えられている姿が印象的でした。先生はどんな難しいことでも相手に理解してもらおうとすることが大切とよくおっしゃっていましたから、私達が理解するのを自分の喜びにしていたのかもしれませんが。私が先生に惹かれ、先生の下で研究することを望んだのは、先生がそのような相手を思いやるという姿勢を学生の指導の中に、そして研究活動の中に持たれていたからだと思います。私に分からないことを相談するときや研究に行き詰まったときは、私が理解し納得するまで、先生は親身になって対応して下さいました。そして、どんなに遅く湯浅先生の部屋にうかがっても、快く受け入れて下さいました。

一方で、湯浅先生は自分に厳しい方だったと思います。いつもご自宅にお帰りになるのが遅かったので、早く帰らなくて良いのですかと訊ねたときは、湯浅先生は笑いながら「そうなのだけどね」とおっしゃっていました。湯浅先生は自分についてはあまり多くを語らない方でしたが、コンピュータの壁紙にお子様の写真を飾るなど、ご家族をたいへん大切にされていたのは分かっていましたから。願わくは、私にもっと力があり、湯浅先生のお手伝いがもっとできれば、せめて、卒業したあとに先生を支えることができる立場になれたら、と思っていましたのに…。

湯浅先生には本当に貴重な時間を頂きました。これから、先生の学問に対する姿勢と熱意を受け継いでいきます。ありがとうございました。

湯浅先生は、私が学部四年のときの指導教官でした。このときの湯浅先生とのミーティングは、メンバー一人一人の研究内容について、時間をかけて議論を行うもので、まだ研究というものの自体がよく理解できていなかったわたしにとって、研究に対する態度のあり方を知る上で、理想的なミーティングでした。

また、勉強会でも指導をしていただく機会がありました。これは、半年で一つの論文を精読するもので、私は、学部四年の冬から、3 題材についての勉強会に参加してきましたが、どの題材も数学が難解でしたので、かなり苦勞をしました。私は分からなくて困ったときに、それがすぐ顔に出てしまうので、先生がそれを見てよく笑っておられました。しかし、先生は、私のような理解の遅い人に対しても丁寧に接する方でしたので、どの題材についても、なんとか最後まで出席することができました。おかげで、研究の視野がひろがり、現在とても役に立っています。また、難しそうなお式や、見たことのない記号が出てきても、あまり慌てなくなりました。

もう少し数学の知識がついたら、先生に聞いてみたいことがたくさんあったので、非常に残念ですが、今まで先生から教えていただいたものを大事にして、研究に取り組んで行こうと思います。

湯浅先生は私の直接の指導教官でなかったため、思い出の多くは研究指導以外のものが多いです。

先生は漫画を読み出すとオーラを発したり、合宿で人知れず逆立ちをしていたり、助教授の位を感じさせない振る舞いが私に親しみを与えてくださいました。さらに合宿のサッカーで、私が先生にタックルされて転倒しているのにもかかわらず、それを目に留めることなくボールを奪いゴールに向かって猛進した時には、先生の天真爛漫さと研究者に必須の夢中になる心を感じることができました。

一方、研究会では、鋭い視点から、かつわかりやすいアドバイスを頂きました。言葉だけでなく、研究内容に対する先生の振る舞いは非常に分かりやすく、そのリアクションから発表の良し悪しを判断していました。

先生の研究内容は、やさしく説明していただいたにもかかわらず、高尚すぎて理解できない部分が多々ありました。これより、先生のお話が理解できるまで自分の知識レベルを上げることが、私の目標のひとつでした。その時期を待たずしてお別れすることになったのは、残念極まりないことです。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。先ほどの目標が達成できた暁には、湯浅先生、天国からお祝いしていただけますか？

私は湯浅先生に直接御指導頂く立場ではなかったため、先生とお話できる機会はあまりなく、研究面で私が直接お言葉を頂けたのは、ミニ論発表会や公開研究会といった場でした。数少ない機会であっただけに、アドバイス頂いた内容は鮮明に覚えています。特に、先生に研究の方向性について良いコメントを頂けた時は、まだ何も出来ていないのに何だか先行きはとても明るいような気になったことを思い出します。また、ミニ論発表会では先生の研究発表を拝聴することもできました。私が先生のお話をなんとか理解しようと臨んだところ、先生はとても平易な言葉で説明を始められましたので、「これなら分かるかもしれない」と、内心思いました。しかし、やはり途中でおいていかれてしまいました。言葉の意味は分かるのに内容が分からない、あれは私にとっては衝撃的な出来事でした。

研究面以外では、こんなことがありました。私はよく実験室や居室の鍵を家に忘れてしまい、終電間際だというのに部屋に入れなくなって焦ることが多々あったのですが、そんな時、突然先生が現れて、「またですか。」と笑いながら鍵を開けてくださいました(「また」というからには、何度かそういうことがありました)。こんな時間まで先生は研究していらっしゃるのだな、と最初は驚いたのですが、そのうち「閉め出されても先生がいらっしゃる」という変な安心感を覚えるようになっていました。きっと先生には御迷惑をおかけしていたのですが、今では私の中で貴重な先生との思い出となっています。

私は、悔しくも最後のお別れをすることが出来ませんでした。この場を借りまして、ここに湯浅先生への心からの尊敬と感謝を捧げ、謹んでご冥福をお祈り致します。

私が最初に湯浅先生にお会いしたのは、2000年の10月、東大工学部に新設された新学科の一授業の場でした。当時私は教養学部の2年生で、工学部進学が決まったばかりでまだまだ勝手がわからない時期でした。先生の担当は、統計の基礎知識を教授するものでしたが、カリキュラム初年度ということもあり一からの授業作りの中、毎週2コマを使って読みきれないほどの詳細な配布資料を自作されていました。当時から私達が行っていた、コース学生による「授業評価アンケート」活動で、先生の「統計・データ解析」は”板書・資料の充実度”で1位の評価を受け、“講義をどれだけ理解したか？”という質問に対しても、多くの学生が1位の評価を付けました。先生が学生の目に見えないところで授業作りの努力を重ねられ、講義内容を理解してもらうために常に学生の意見を取り入れる謙虚な姿勢を心掛けられていたからだと思います。

その後、私は現在のコースに進学し、先生と同じ本郷キャンパスに通うようになったのですが、不思議と営団地下鉄南北線の東大前駅のホームでお会いする機会がありました。時間は常に深夜23時を回った頃、先生は電車を待つ間、論文に目を通されていました。私を見るなり、「お、また会いましたね。お疲れ様です」と先生がおっしゃられて、私が「お互い様ですよ、先生」と笑う会話が毎回のように繰り返されました。お忙しいにも関わらず、私が飯田橋で電車を降りるまでの2駅の間、「最近のコースの様子はどう？」と話を合わしつつ、「そうかそうか。大変だねえ」と半分疲れた、それでも自然な笑顔で語りかけられるのが、とても心地よい時間でした。

そんな先生が逝去されて、夜遅い東大前駅で会う人もなくなりました。身に沁みる寂しさに、ご遺族の皆様のご心中察するに余りあります。生前の御恩に深謝すると共に、学んだことを糧に精進していきたいと思っております。



まず、第一に湯浅先生に感謝し、お礼の言葉を述べたいと思います。先生にご指導いただいたこの一年半は、私にとって非常に有意義なものでした。ひとえに先生のお蔭です。本当にありがとうございました。この突然の出来事が残念でなりません。

私は湯浅先生の研究テーマに惹かれて、湯浅先生の研究室へ進学しました。湯浅先生がいらっしゃらなかったら、私がこの研究室へ来ることも無かったと思います。指導教官として先生には、言葉では感謝し尽くせないほどお世話になりました。物分りの悪い私に何度も丁寧に指導いただきありがとうございました。突然に質問に伺っても、仕事の手を休め、親切に答えていただきました。先生のお話には、難しい問題も「そうだったのか」と納得させられる不思議な説得力がありました。

湯浅先生が人の研究発表を聞くときには、先生はいつも納得するときにはうなづき、納得いかないときには首をかしげていられました。私などは、発表や質疑の良し悪しを先生の反応を見て、判断していました。また自分の発表の時には、先生の反応に一喜一憂していました。発表中に先生に首をかしげられるのを恐れ、そして実際にかしげられては、落ち込んでいたものです。

研究以外の面でも先生にはお世話になりました。私のその場の思いつきのようなくだらない質問にも、その豊富な知識から、ときにはユーモアを交えて、答えていただきました。合宿でのテニスなどで見せられた先生の高い運動能力は、私の大学の先生に対するイメージを覆すものでした。

先生からは与えていただくばかりで、こちらからは何も返せず、申し訳なく思っています。また、お返す機会が失われてしまったことも、残念でなりません。湯浅先生、本当にどうもありがとうございました。

最後に先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻 太田研究室 博士課程 3年  
旧所属: 東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻 湯浅研究室  
杉 正夫

私が湯浅先生に初めてお会いしたのは今から4年前の春のことです。その時私は修士2年になったばかりでした。名古屋大学から赴任して来られた湯浅先生は、まず研究室のメンバーにご自分の研究内容を紹介下さいました。それは数学、特に微分方程式を軸に自律分散システムを設計するというもので、私は強く興味をひかれました。

博士課程に進学して先生のもとで研究したいのですが、とお願いしたところ、「一緒に勉強しましょう」との有難いお返事を頂きました。湯浅先生らしいお言葉だなと今でもよく思い出します。

国際学会にご一緒した時のことです。海外の研究者が身を乗り出して先生の発表を聴いていたのが印象に残っています。研究内容の際立った独創性に加えて、笑顔で楽しそうに語りかける先生のお姿が聴衆を引きつけたのだと思います。思えば赴任して来られた折の研究紹介も終始笑顔でした。

九月のある日、私は研究報告のため先生のお部屋に伺いました。その日も先生は変わらぬ笑顔で、今後の研究方針についてご意見を下さいました。それが湯浅先生とのお別れとなってしまいました。

公私共に充実を迎えておられた折のご逝去で、まことに残念でなりません。また、お世話して頂くばかりで私から先生に何もして差し上げられなかったことが悔やまれます。今後は研究を通じて先生にご恩返しできれば、と考えております。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

私と湯浅先生の出会いは、学部3年生のプログラミング実習の時でした。新学期で緊張しながら先生待つ私たちの前に、あの笑顔の湯浅先生がいらっしゃいました。その笑顔にほっとしたものです。古典制御の時間にも代理を何度かされました。先生の講義は非常に分かりやすいものでした。その時は「なるほど！」と思い、意気揚々と講義を受けさせていただきました。しかし講義終了後に改めて考え直していると、やっぱり分かりません。その繰り返しで、なんだか先生にだまされている気分になったものです。それほど、湯浅先生は難しい概念を私たちに分かりやすく説明してくれたものです(注1)。

研究室では、湯浅先生に指導教官になっていただきました。講義以上に複雑かつ難解な数式や概念をいとも簡単に説明される姿を見て、一層、湯浅先生を尊敬するとともに、自分の不勉強を痛感したものです。また、修士修了後に進学するか就職するか悩んでいた際には、進学した場合の研究テーマや学費などに関して親身になって相談に乗っていただきました。結果として、進学することはありませんでしたが、湯浅先生に相談に乗っていただいたことは、自分の進路を決定する上でも非常に心強いものでした。

一方、湯浅先生のお部屋でミーティングを行っている最中に、先生のMacから聞こえてくる音声には、どのような反応をしたら良いものか、当惑させられたこともありました。また、お子様のお話をされるときに、笑顔の湯浅先生の目じりがさらに下がる様子は、いつも心を和ませてくれました。

先生の突然の訃報を耳にしたときには、まったく信じることができませんでした。今後は、湯浅先生を見習いがんばってゆきたいと思います。いろいろありがとうございました。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(注1)制御が理解できなかったのは、本当に、湯浅先生にだまされていたわけではなく、私の理解力不足のためです。

湯浅先生は素晴らしい研究者である。言うに及ばず、である。

知識・思考力そして努力。どれも一級品。しかしいつでも、『俺なんかまだまだ』と言っていた。

『千葉君は優秀ですよ。』

お世辞かもしれないが、湯浅先生に言われたこの言葉は心底嬉しかった。自分が修士の時、自分の指導教官であった太田助教授が入院した。その間、研究の相談相手になってくれたのは湯浅先生だった。いつも突然押しかけ、整理もされていない疑問・質問をしたが、根気強く理解して下さり、明確な答えや資料を与えてくださった。ある日、『バカな質問ばかりですみません』と半ば冗談交じりで謝った。それを受けた湯浅先生の言葉が、先の言葉である。やはり冗談交じりで。

高尚な理論を操りつつ、冗談を理解し、ユーモアたっぷりに話す。どんな集団にも溶け込め、その頭脳だけでなく人柄でも尊敬を集める。『敵わないなあ。』時に実感させられた。

先生の研究を理解するには様々な知識と思考力が必要だ。自分にはそれがないので、先生を捕まえては、こんなことを繰り返した。『湯浅先生が言っているのは、つまり…(中略)…ということですか?』『そうです、そうです。これは…(中略)…という意味です。』『なるほど!』

理解できたことが楽しかった。知的好奇心が満たされ自分が成長した、そんな感覚だった。

やはり戯れの会話。

『いつか湯浅先生に並べる日が来るのかなあ?』『もちろんですよ。』

先生の目指した高みがどこにあるのかも今は掴めていない。でも、そのいつかを目指し研究していきたい。先生の研究を少しでも理解し感銘を受けた人間として、そこに近づきたい。

自分の能力では不可能かもしれない。しかし先生の研究に触れ、それに共感し、その高みを目指す。そういう優秀な研究者はたくさんいる。

だから湯浅先生の研究は消えない。必ず、それは受け継がれる。なぜなら湯浅先生の研究は素晴らしいからだ。言うに及ばず、である。

2000年の4月、私は学部4年で卒業研究をするための研究室として、湯浅先生の研究室に配属されることとなりました。配属が決まった後、その挨拶に湯浅先生の助教授室を訪れたときのことは、今でも鮮明に覚えています。

私は決してマジメな学生ではありませんでしたから、卒業研究どころか、卒業単位を揃えることすら危ぶまれていました。そんな学生を取ることはさぞかし嫌がっているだろうという察しのもと、部屋のドアを叩く手は心なしか震えていました。中から、「はい」という軽快な声、「失礼します」と中に入り名を名乗ると、かけられた言葉は「よく来たね」。そこで先生は、卒業研究の話、ご自身の研究の話、研究室全般のことなど、丁寧に説明くださいました。十数分という短い間でしたが、いかに先生が研究に情熱を傾けているか、そして多くの学生を指導し、学ぶチャンスを与えることをいかに深く考えているか、浅学の私にも身にしみて伝わってきました。一通りのお話の後、最後にこのような言葉をかけてくださいました。

「何か分からないこと、不安や悩み事があったら、いつでもここに来なさい」。

部屋を後にし、ドアを閉める私にはもはや震えはなく、心の中の迷いよりは、卒業研究への期待が私を凌駕していました。

一人の人生の中で会える人の数は有限で、その方々から受ける影響はその後の人生において計り知れないものであると思っております。私は20代前半で、その先に確信の持てる道を見出せずにいた中、湯浅先生のような方に出会えたことは、非常に幸運で、あまりに大きな財産であったことは言うまでもありません。しかし、まだまだ多くのことを学ばせて欲しかった。過去形でしか語るができないことに強い無念さを感じると、ついそのような思いがこみ上げてまいります。

湯浅先生は私が卒論生として研究室に配属されてからこの秋まで研究指導をして下さいました。私のような頭より先に体が動いてしまうような生徒を指導するのはさぞ大変だったことと思います。問題が起きてよく考えもせずそのまま突っ走ってしまう私に歯止めをかけてくれるのはいつも先生でした。またその問題の核心を見抜き解決策をたちどころに示してくれるのも先生でした。先生は、私のような者が直面する問題に対して全て解決策をもっておられました。

湯浅先生は、亡くなる前の数ヶ月間は長年思い描いてきた研究テーマに取り組み始められた様子で、大変な意欲を研究活動に注いでおられました。それに関する先生の最初で最後の講義を拝聴させていただいたのは亡くられる前日の研究会でした。そこでは、リャプノフの安定理論の双対性についての講義をなされました。しかし私たちは、基礎となるべき制御理論、グラフ理論をほとんど理解しておらず、その部分の解説で終始してしまい先生の構想されておられた内容まで到達できませんでした。先生は大変がっかりなされたことと思います。

湯浅先生がそのまま研究活動をつづけておられたならば、必ずや世の中の制御理論を根本から覆す理論を打ち立てられたに違いありません。それのもととなる講義を私たちの勉強不足によって肝心な部分を拝聴し損なったことは思い出だけでも悔やまれてなりません。同時に私のような力不足の者でも僭越ながら何かしらの義務感、使命感に似た感覚をも覚えます。今でも私が単純なことを質問した時、湯浅先生が苦笑しながら丁寧に教えてくださった姿が目に残ります。最後に湯浅先生のご冥福をお祈りいたします。

私が、最初に湯浅先生の講義を受講したのは、2年生の冬学期の時の統計の講義でした。その後も、湯浅先生が講義された U-Mart とマルチエージェントの2つの講義も受講し、知能社会システムコースでの講義は全て受講しました。

3つの講義を通しての湯浅先生の印象は、毎回、講義のために時間を割いて準備をしてきていて、本当に教育熱心な人だと思いました。特に統計の講義では、毎回、手作りの資料をきちんと作成し、難しい内容を分かりやすく一生懸命説明なさっていたのは有名です。

学生にいろいろなことを伝え、教えるという一方で、いつも学生の意見に耳を傾けて下さったことも非常に印象的でした。多くの学生の印象としては、教育熱心だという印象が多いのですが、湯浅先生の講義を受講していた関係で、先生と接する機会も多く、私の中ではこういった印象につながっています。そして、この印象につながっているのはなぜかと言われれば、やはり「うん、なるほどね」という口癖だと思います。

何気ない一言ですけれども、この一言はすごく嬉しい一言だと思います。話し手としては、聞き手がきちんと自分の話を聞いてくれるかどうかは気になることだから、この一言があるとないのでは、話していて全然違うと思います。

知能社会コースの授業評価アンケートでは、講義を受講していた関係から湯浅先生の担当となることもありました。先生との面談では、こちらからいろいろと説明をしますが、更に、出てきた結果や意見に対して、どうしてと更に説明を求められたことを覚えています。このようなところから、湯浅先生は、学生の話に耳を傾けるだけではなく、学生のことを少しでも理解しようと普段から努めていたのではと感じます。

相手が分かるように話す。相手の話に耳を傾ける。何より、集中して物事に取り組む。湯浅先生が実践していたこういった姿勢は、これからずっと見本にしたいと思います。

湯浅先生が名古屋大学から東京大学に移ってこられた 99 年、私も他大学から新井研究室の博士課程に進学し、初めて湯浅先生にお会いしました。その当時、ちょうど研究室のコンピュータの環境整備しなければならない状況にあり、色々と教えて頂きながら、取り組んだのを憶えています。これを始めとして、湯浅先生には研究でもお世話になりました。研究会で貴重な御意見を頂いただけでなく、先生のオフィスに研究の話を伺いに行くと、研究グループが異なる私に対しても気さくに応対して頂き、理論の説明や文献の紹介など、大変お世話になりました。

研究以外では、夕食をよく御一緒させて頂きました。平日は研究室皆で食事に出掛けることが多かったのですが、研究室に来る人が少ない土日に先生がいらっしゃる時は、わざわざ実験室まで食事の誘いに来て頂いたりして、申し訳なかったです。湯浅先生が実験室のドアからそっと顔を覗かせて「メン行きませんか？」とニコニコしながらおっしゃるのを思い出すと今も恐縮してしまいます。特に印象に残っているのは去年の夏に夕食に行った時のことでしょうか。お盆が近かったこともあり、夏休みの帰省について先生に尋ねると、夏は帰省せずに研究に打ち込むとの答えが返ってきました。秋に子供が生まれるから今は特に頑張っていて、秋の帰省を楽しみにしているとおっしゃっていたことが忘れられません。

先生が亡くなられる少し前も食事を御一緒させて頂きました。そんなこともあつてか、いつも会っているような気がしていたので、訃報を知ったときはただ驚くばかりでした。湯浅先生がお亡くなりになってもうすぐ半年が経とうとしていますが、今でも研究に、また教育にと熱心に取り組まれているような気がしてなりません。

湯浅先生、今まで本当にありがとうございました。



私と湯浅先生の出会いは、「情報システム第二」という授業でした。当時(1999年)私は、工学部精密機械工学科に進学し、湯浅先生の授業を履修させて頂きました。周囲の友人たちが勤勉に湯浅先生の授業を受講しているなか、私はアルバイトと授業を掛けもちしており、先生の授業には全体の6割程度しか参加しないというなんとも失礼な受講具合でした。また、授業のレポートにおいても、きちんとした解答ができていない状態で提出したのにもかかわらず、湯浅先生は、それでも自分できちんと課題を解いたのだからという理由で、なんとこんな私めに「優」をくださったのです。なんともやさしい先生でした。

4年生に進学し、新井・湯浅・太田研究室に配属されてからも、湯浅先生は、我々学生の発表も熱心にお聞きくださいました。時には、すばらしいアドバイスを頂いたりもしました。またある時には、勉強会で私が担当となったテーマで、わからなくて困っていたところ、湯浅先生は丁寧に私が理解するまで教えてくれたりもしました。とても助かりました。精密機械工学専攻の先生の中で、湯浅先生は、努力する学生を最も評価して下さる、やさしい先生でいらっしゃったと思います。

短い間ではありましたが、今までいろいろとありがとうございました。

私が湯浅先生に初めてお会いしたのは、新井研究室に配属になった今年 4 月のことです。湯浅先生の第一印象は柔らかい、やさしい雰囲気の方だなあとというものでした。そしてとても丁寧な話し方をされるのが印象的でした。初対面の人には結構緊張してしまう性質なのですが、湯浅先生のその雰囲気のせいか初めての時も普通にお話することが出来たことを覚えています。

先生は研究者としても、人としてもとても魅力的な方だったと思います。ミニ論の追加発表をなさった事がありました。自分の研究について発表してらっしゃる湯浅先生がとても生き生きと、楽しそうであったのが印象に残っています。聞いていて私自身も楽しそうだと、すごいと先生の熱意に引き込まれていきました(内容は私には難しく、理解できなかったにも関わらず・・・)。本当に研究を楽しんでらっしゃることが感じられて、なんだかとてもうらやましかったことを覚えています。そして私もがんばらなければ!!と思ったことも。

また研究室合宿でのテニスやサッカーでの滌刺ぶり。研究室中の誰よりも若いのではないかとこのような動きをしていらっしゃいました。泥だらけになりながら走ってらっしゃる姿も印象的でした。

本当にエネルギーがあって、それでいて柔らかい印象の素敵なお方でした。半年間という短い間で、あまり先生と接することが出来なかったのが残念です。色々とお教えていただきましたのですが・・・。その中でも湯浅先生から感じたもの、得たものというのを忘れずに、今後に活かしていけたらと思います。

湯浅先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

湯浅 秀男先生を悼む

新井 民夫(精密機械工学専攻)

湯浅君、君はなぜ逝ってしまったのでしょうか。自律分散システムの理論研究がやっと佳境に入り、画像認識から交通信号制御までその応用が広まってきたというのに。

湯浅君、君の笑顔をもう見ることはできないのでしょうか。難しい理論をやさしく説明するのが、君にとってもっとも幸せな時だったのでしょうか。その時、学生たちも私も、みな君にとって可愛い幼子だったのですね。君は忍耐強く、式が持つ意味を説明してくれました。

- - - \* - - -

前東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻助教授 湯浅秀男先生は、平成14年9月18日ご病気のため41歳という若さで急逝されました。日ごろ大変エネルギーに活躍されていただけに、未だに信じられない心地であります。

先生は、名古屋大学大学院工学系研究科電子機械工学専攻講師から、平成11年に東京大学助教授として赴任され、以来、大学院精密機械工学専攻ならびに工学部システム創成学科知能社会システムコースの中核としてご活躍いただいております。教官や学生からの信望も厚く、これからの期待しておりました。誰に対しても分け隔てなく笑顔で接する先生の人柄は学生からも同僚からも好かれ、特に、難解な式の意味を易しくかつ優しく説明する能力は抜群で、多くの学生が先生の元に集まりました。

先生は、グラフ上の反応拡散方程式という概念の元に、従来体系付けられていなかった自律分散システム的设计論を確立しました。また、それらの基本概念を画像処理、多脚歩行ロボットの制御、マルチエージェントロボットの制御等多岐に渡る応用分野に展開し、基礎応用両面において卓越した成果を残されました。理化学研究所 バイオ・メテックコントロール研究センター制御系理論研究チーム フロンティア研究員を併任されて、生物を模擬したロボットの制御理論を展開されました。これらは、自然界の現象と数学とを結びつける大変オリジナリティの高い研究でした。多くの応用研究がこれから花開くときであっただけに、先生の急逝が本当に悔やまれます。先生は計測自動制御学会自律分散システムシンポジウムの中心メンバーとして研究者を取りまとめ、国際会議 International Conference on Intelligent Autonomous Systems のプログラムチェアを務めるなど学会活動でも多くの貢献をしました。

ご遺族には、律子夫人、四歳になる長女範子さん、それに本年9月に誕生したばかりの次女の令子さんがおられます。湯浅先生のご逝去は、奥様がお産のためにご実家に帰っていた最中の出来事であり、ご本人は生まれたお子さんに面会できないままにお亡くなりになってしまいました。奥様ならびにご遺族のご心中察して余りあり、葬儀会場の涙を誘っていました。

- - - \* - - -

湯浅君、君の残した自律分散システム理論は、君の弟子達が、私達がしっかりと継承しています。君の目指した「センサとアクチュエータの双対性理論」も、きっと大きく育っていくことでしょう。まだ君から見れば、我々はおぼつかない子供でしょうが、我々も頑張ります。ですから、湯浅君、安心してお休みください。

## 湯浅秀男先生 年譜

年	月	事項
1961年	4月	出生(2日)
1968年	4月	名古屋市立豊田小学校入学
1974年	3月	名古屋市立豊田小学校卒業
1974年	4月	名古屋市立大江中学校入学
1977年	3月	名古屋市立大江中学校卒業
1977年	4月	愛知県立中村高等学校入学
1980年	3月	愛知県立中村高等学校卒業
1980年	4月	名古屋大学 工学部 電気学科入学
1984年	3月	同上卒業
1984年	4月	名古屋大学大学院工学研究科博士課程(前期課程) 情報工学専攻入学
1986年	3月	同上修了
1986年	4月	名古屋大学大学院工学研究科博士課程(後期課程) 情報工学専攻進学
1986年	7月	同上中途退学
1986年	8月	名古屋大学工学部助手(情報工学)
1992年	1月	博士(工学)(名古屋大学)
1992年	12月	名古屋大学工学部講師(電子機械工学)
1993年	12月	理化学研究所バイオミメティックコントロール研究センター フロンティア研究員(非常勤, 併任)
1994年	7月	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門 1993年度 ROBOMECH 賞授賞
1999年	4月	東京大学大学院工学系研究科助教授(精密機械工学専攻)
2002年	9月	逝去

## 謝辞

本追悼文集を編集するにあたり、各方面の方々に E-mail (メーリングリストなど)を通じて連絡のご協力をいただきました。この場でお礼を申し上げます。ありがとうございました。

年末から年始にかけて、忙しい時期であるにもかかわらず、多くの方々にご寄稿いただき、心より感謝いたします。ありがとうございました。

また、企画者の連絡の不手際により、連絡が行き届かなかったためにご寄稿いただけなかった方がいらっしやられたかもしれません。誠に申し訳ございませんでした。

本文集が、将来ご遺族にとって故湯浅先生の姿を偲ぶよすがとなることを願っています。

平成 15 年 2 月 10 日  
理化学研究所 バイオ・ミメティックコントロール研究センター  
フロンティア研究員  
小田島 正 (環境適応ロボットシステム研究チーム)  
小林 祐一 (運動系システム制御理論研究チーム)

本文集についてのお問い合わせは下記までお願いいたします。

編集:平成 15 年 2 月 11 日

理化学研究所 バイオ・ミメティックコントロール研究センター

〒463-0003 名古屋市守山区 下志段味字穴ヶ洞 2271-130

TEL : 052-736-5864 内線 3136 FAX : 052-736-5865

小林 祐一 [koba@bmc.riken.go.jp](mailto:koba@bmc.riken.go.jp)

-----  
東京大学大学院 工学系研究科 精密機械工学専攻

〒113-8656 東京都 文京区本郷 7-3-1 工学部 14 号館 827 号室

TEL : 03-5841-6457 FAX : 03-5841-8548

新井 民夫 [arai@prince.pe.u-tokyo.ac.jp](mailto:arai@prince.pe.u-tokyo.ac.jp)